

# 大菩薩峠

鈴慕の巻

中里介山



天井の高い、ガランとした田舎家の、大きな炉の傍に、寂然として座を占めているのが弁信法師であります。

時は夜であります。

弁信の坐っている後ろには、六枚屏風の煤けたのがあつて、その左に角行燈がありますけれど、それには火が入っております。

自在鉤には籠目形の鉄瓶がずっしりと重く、その下で木の根が一つ、ほがらほがらと赤い炎を立てている。

この田舎家の木口というものが大まかな櫂作りで、鉋のはいつていない、手斧のあとの鮮かなところと、桁梁の雄渾（？）など

ころとを見ても、慶長よりは古くなく、元禄よりも新しくない、  
中通りの農民階級の家づくりであることはたしかであります。

さてまた、弁信の頭の上の高い天井は、炉の煙を破風まで通  
すために、丸竹の簀子すのこになつていて、それが年代を経ているか  
ら、磨けば黒光りに光るいぶしを包んだ煤すすが、つづらのように  
自在竹じざいだけの太いのにからみついて落ちようとしている。

そこで、弁信は、熊の皮の毛皮でもあるような敷物をしき込  
んで、寂然として、何物にかしきりに耳を傾けているのであり  
ます。

特に念を入れて何物をか聞き出そうとしないでも、ただこう  
して坐つていさえすれば、弁信そのものの形が、非相非々相界  
のうちの何物かのささやきを受入れようとして、身構えている  
もののようにも受取られることでもあります。

果して、こうしていると、弁信の耳に、あらゆる雑音が聞え出しました。

聞えるのではない、起るのであります。それは非常なるあらゆる種類の雑音が、弁信の耳の中から起りました。

そうでしょう、この田舎家の存在するところは、内部から見では、日本の国のドノ地点にあるかわからないが、通常の人がこの中に坐つていれば、それは深山幽谷の中か、そうでなければ、人里に遠い平野の中の一つ家としか思われないことであるます。

この一つ家の中には、弁信その人のほかには、絶えて人間の気配のするものを容いれていないと同じく、その煤すすけた天井には鼠の走る音もあるのではなく、その外壁のあたりに、鶏けい犬けんの声だも起らない。周囲に谷川のせせらぎすらも聞えない。軒端を

渡る夜風のそよぎすら聞えないところを以て見れば、万籟死ばんらいしたりと感ずるのは無理ありません。

しかし、夜というものは一体に、沈静と、回顧とを本色とするものですから、普通平凡な景色も、夜の衣をかけて見ると、少なくとも一世紀の昔へ返して見る事ができるものですから、まして夜更け、人定まつた際においては、都会の真中であつてさえ、太古の色をぼかして見せることもあるのですから、この深夜の弁信のいるところも、存外、人間臭いところであるかも知れません。

ところで、空寂と、沈静と、茫漠と、暗黒と、孤独とは、形の通りで、弁信なればこそ、仔細らしく耳を傾けて何物をか聞き取ろうと構えているように見えるものの、余人であつてみれば、聞き取るべき一言もなく、澄まし込むべき四方あたりの混濁こんだくとい

うものの全然ない世界ですから、もし弁信の耳が、この間から何物をか聞き得たとすれば、それは彼の耳の中からおのずから起ってくる雑音を、彼自身が、自己妄想的に聞き操はんすうてきっているに過ぎないので、この点は、かの清澄の茂太郎が、反芻的に即興の歌をうたうのと同じことなのであります。

といつても、これを一概に妄想扱いにするのは心無わざき業です。チチアンの眼より見れば、あらゆる普通の人間は、みな色盲に過ぎないそうであります。もし地上に特別の人があつて、普通の人の見えない色を見ることができれば、特別の人があつて、特別の音を聞き出さないという限りはありません。

すでに特別の色を見、特別の音を聞き得る人がありとすれば、この普通の人の見得る世界において、普通以上の、或いは以外の世界を——つまり天国といい、地獄というような世界を見て

いる人がないとは言えないはずで

いる。人がないとは言えないはずで。城松という盲人は、鳴滝なるたきの下で簫しょうを吹くと、人ただ簫声あるを聞いて、瀑声あるを聞かなかつたそうであります。

ある夜、忽然こっぜんとして立つて人にいつて曰いわく、ああ、今夜は自分の吹く簫の聲が尋常でない、おそらくはこの都下に大變が起ろうも知れぬ、と馳はせて愛宕山あたごやまに上つて僧院に泊つたところが、その夜、洛中洛外に大震があつて、圧死するもの無数、それは慶長年間のことであつたという話。

間齋はくらくという伯樂はくらくは、年四十になつて明を失したが、人の馬に乗つて戸外を過ぐるものを聞いて、その蹄ひづめの音で馬の駑どと駿しゅんと、大と小と、形と容と、毛の色とを判断して、少しも誤らなかつたといふことあります。

深草けんぎようの檢校けんぎようといふのは、享保年間、京都に住んで三絃をよく

した盲人であつたが、老後におよんで人にいつて曰く、「私の聞き得たところでは、天地の間には三百六十音がある」

今、弁信というおしやべり坊主は、その異形なる法然頭いぎよう ほうねんあたまの中で何の世界のことを考え、その見えざる眼で、どれだけの色彩を味わい、これのみは異常に発達した聴管のうちに、どれだけの音声を聞きわけけるの官能を与えられているか知れませんが、この万籟ばんらい死したるところの底において、ついに何物をか聞き出そうとして聞き出し得たものの如く、

「誰やら尺八を吹いておりますね、あれは鈴慕れいぼの曲でございませす」

かく無雑作むぞうさに言つて、また仔細らしく小首を傾けたものであります。

ただし、弁信が感心をはじめた時分には、もう曲は済んでし

まったものと見えて、弁信は姿勢をくずして、炉辺の火箸ひぼしを取つて、火をかきならしました。

二

弁信が鈴慕の一曲を聞き終つて、ホツと息をついた時に、天井の煤竹すすたけの簀子すのこから、自在竹を伝つてスルスルと下りて来た。ピグミーグミーがありました。

籠目形かごめがたの鉄瓶てつびんのつるへ足をかけて、ひよいと炉べりへ下り立つと、無遠慮に弁信と向い合つたところへムズと小さなあぐらをかいてしまい、十年の親しみがあるようになれなれしく、

「弁信さん、淋さびしいね」

「あい」

「弁信さん、いやに澄ましこんでるじゃないか」

「ええ、そういうわけでもありません」

「もう少し火をお焚たきよ、おいらがこの杉の葉をかぶせてやらあ」

ピグミーは、杉の枯葉を一つ一つ取って炉の火に加えると、火の色が珊瑚さんごのように赤くなりました。

そこでピグミーは、仔細らしくあごの下へ手を当てて、火の光をながめて、何か弁信の話しかけるのを待っているかのように見えます。

ところが、弁信がいつこう気乗りがしないようでしたから、ピグミーが、また何かハズミをつけてやらないことには、手持無沙汰でたまらないはめとなつて、

「ねえ、弁信さん、今までお前、何を聞いていたの」

「尺八を聞いておりましたよ」

「へえ、おいらにはいつこうそんなものは聞えなかったが、どこで、誰が吹いていたんだい」

「信濃の国の、白骨の温泉で、尺八を吹いているのが、いま私の耳に聞えました」

「じよ、じようだんじやねえ！」

ピグミーが反そつくり返つてしまいました。

「弁信さん、お前、ここをどこだと思つてるんだい——信濃の国というのは、これから一百里も離れているんだぜ、なんぼお前の勘かんがいいからといって、信濃の白骨で吹く尺八が、お前の耳に聞えるはずはあるめえ。でも、お前のことだから何とも知れねえ。そうして、その尺八は何を吹いていたんだい、それを聞かしてもらいてえ」

「鈴慕れいぼの曲を吹いていたのですよ」

「鈴慕の曲というのは、どんなんだい、面白おもしろかったかい」

「ええ、ずいぶん感心を致しましたよ、今までに覚えのないほど、感じてしまいました」

「そうかね、お前がそれほど感心するくらいならずいぶん面白かったろう。そうしてそれは、どんなに面白かったんだい、それを聞かしておくれな。いやいや、それより先に、その鈴慕の曲つてやつはいつたい、何だね、何を意味しているんだか、弁信さん、お前はものしりだから、そいつから先に教えておくんなさいな」

「それは、わたしでなくつたつて、少しでも尺八のことに心得のある人は、鈴慕の名前ぐらいは誰でも知っていますよ、また相当に稽古をした人は、吹けといえど誰でも吹きましよう、別

に珍しい名前でもなければ、秘曲というほどのものでもございません。ですから、私共のようなものでさえ、こうして耳を澄ましていきますと、ははあ、あれは鈴慕だな、と忽ちたちまに合点がてんを致すのでございます。で、私も、これまで堪能たんのうの方々から、鈴慕を聞かせていただいたことは幾度かわかりません、聞かせるには聞かせていただきましたけれど、不敏な私には、どうしても今まで、掴つかむものが掴めない心持でおりました、それを今晚という今晚は……身にしみじみと思ひ当ることがございました」

「おどかしちゃいけないぜ、弁信さん」

ピグミーが、突然に頓狂な声でこう言いましたから弁信が、ハツとして、両手で自分の胸をおさえました。

「な、なにを言うのです」

弁信としては珍しく、唇をわななかせながらピグミーの言葉

を聞きとがめると、ピグミーがせせら笑つて、

「ホンとにおどかしちゃいけないよ、弁信さん、お前の身体が二つに割れてらあ」

「え」

「そらそら、肩から胸へかけて、すつと糸を引いたように二つに割れて、そこから絹糸のような血が流れていらあ」

「有難う、私も、そんなことだろうと思いましたが、拭きましよう」

いったん、驚かされた弁信が、静かに懐中へ手を入れて、真赤に染った白布を引き出しながら、

「どうも折々、こういうことがあつて困ります、いいえ、別段に痛むのなんのとうのではありませんが……それはそうとしまして、今のその鈴慕れいぼの曲ですな、出過者ですぎものの私は、鈴慕の曲

を聞かせていただくごとに、堪能の方々にこれをお尋ねを致してみたのでございます、いったい鈴慕の曲は、どなたの御作曲で、どういう趣を御表現になったのでございますか、そのお方は、その時代は——と生意気千万にも、繰返し繰返しておたずねを致してみましたが、不幸にして、どなたも私のために、明快な御返事を与えて下さる方がございませんでした。ただ伝来の本曲がこうと教えられているから、この手を吹いているのみだ——とこう御返事になるのが常でございました。そのうち、もう少し進んだのが、あれは尺八中興の祖黒沢琴古が、わざわざ長崎の松寿軒まで行つて、ようやく伝えられて来た本手の秘曲である、琴古は、虚空と、鈴慕の秘曲を習わんと苦心しましたが、当時の先達せんだうが、誰も秘して伝えてくれないものですから、遥々はるばると長崎までたずねて行つて、ようやくあの『草そう』の手を覚え

て来て、伝えているのが今の琴古流の鈴慕だ、と教えて下さる方がありました。そこで私は例の出過者の癖と致しまして、では琴古さんが伝えたといわれるそれが『草』の鈴慕ならば、当然『行』と『真』とが無ければならないはずでございますが、その行と真との鈴慕は、どなたが伝えておいでになりますか、それを秘して黒沢琴古に伝えなかつたという先達は、誰からそれを許されたものでございますか、その次第相承のほどを承つて、根元にさかのぼりたいとこう考えたものでございますから、随分しつこく、その都度都度に、人様にたずねてみましたけれど、ついにわかりません。これまで吹く人も知らないで吹き、聞く人も知らないで聞き、そうして、そこに疑いを起す人すらもなかつたということに、かえつて、私が驚かされたような有様でございました。尤も私に、臨済と、普化との、消息を教えて下

すつて、臨濟録の『勘弁』というところにある『ただ空中に鈴れいの響、隠々いんいんとして去るを聞く』あれが鈴慕の極意ごくいだよ、と教えて下さった方はありました。その時、出過者の私は、その方向つて、ではあの尺八の鈴慕は、普化禅師の脱化の鈴の音そのままを取った響なのでございますか、或いは、臨濟大師がお聞きになつた鈴の音をうつしたのでございますか、とこう申しますと、その方が、イヤそうではない、そのいづれでもない、普化禅師に法を受けた張伯というものがあつて、これが洞簫とうしょう——今でいう尺八を好くし、普化禅師の用いた鈴の代りにその洞簫を用うることにした、それが鈴慕の起りである——と斯様かように教えて下さいました時、またしても出過者の私が、それではあの鈴慕は張伯の鈴慕でございませうか、と尋ねました。つまり私の心持では、鈴慕は臨濟大師の鈴慕か、普化禅師の鈴慕か、ただ

しはその張伯という方の鈴慕か、ぜひともそれがお聞き申してみたかったです。私のおたずね方が要領を得なかつたせいでしょう、かえつて私が叱られてしまいました。ところが今晚になつてみますと、そんなことをしつこくたずね廻つた私というもののお愚かさが、つくづくと身に沁しみみて参りました」

「どうです、傷は痛みますか」

とピグミーが言いました。

「別段、痛みはしません、これが人様の眼に触れて困ります。

甲州の上野原の月見寺の時の怪我なんだろうと思ひますが、ふだんはなんともございせんが、どうかすると、弁信さん、お前は大変な怪我をしているではないか、肩から左の脇腹まで、袈裟けさがけに刀を浴びせられていますね、よくその傷が治なおりましたねえ、痛みはしませんか、とこう言われて、はじめて私が驚

くのでございます。私自身にはなんとも、痛みも、痒みも、残るのではございませんが、人様がそうおっしゃって、私を慰めて下さるので気がつきません。着物の上からまで、そんな創痕きずあとが見えるのでございますか知ら」

弁信が白い布を懐ふところへ入れては出し、入れては出しして見せる。それが、その度毎に血に染まつているのです。弁信自身は、拭うても、拭うても、拭いきれぬ血を拭いているとは思わないでしょうが、見ているピグミーは、眼を皿のようににして、そのおびただしい血痕が、弁信のいずれの肢体から滲しみ出でるのだか、驚惑と、興味と、恐怖とに駆かられて見ていたが、やがて気の毒そうに、

「弁信さん、お前もかなり疲れているから、お休みなさい、おいらはこれから出かけます」

「そうですか、お前さん、これからどこへ行きます」

「そうさね、どこと行ってべつだん当てはないのだが、お前の  
いま言ったその信濃の国の、白骨しらほねというところへでも行つてみ  
ようかと思つているのさ」

「あ、そうですか、白骨へ行きますか。白骨へ行きましたら、皆  
さんによろしく」

「それじゃお前、弁信さん、横になつてゆつくりお休み、おい  
らはこれで失礼するから」

といつてピグミーは、軽快に立ち上り、またも籠目形の鉄瓶の  
つるに足をかけて、自在竹をスルスルとのぼつて、天井の簀すの  
間に隠れてしまいました。

弁信が熊の敷皮の上に横になつたのは、そのあとのことと、  
横になるとひじまくら肱枕にスヤスヤと寝入つてしまいました。

同じ夜の、同じ時刻のことです。

ところは、信濃の国の、白骨の温泉への山路を急ぐ一人の旅人がありました。

外は満天の月光でありまして、地は一面の雪であります。

白骨への嶮山難路を、今の時候に、今の時刻に、しかもひとり旅で辿るといふことは、全く思い設けぬことで、何か非常の用向があるか、そうでなければ、ついつい道に迷って、松本平へ帰ることもできないし、そうかといつて飛驒ひだの国へ出ようというのは途方もないことです。

弁信に向つてピグミーが、これから白骨へ出かけてみると言

うにはいつたが、ここに現われたのは、いくら遠目に見ても、そのピグミーでないことは、姿と、形と、足どりを見さえすれば、誰にもわかることです。

この時代と、年代とに、雪の白骨道を夜歩くということとは、全く途方もない現象というべきで、その人柄と、用向とも、全く想像のほかと言わなければならぬが——この旅人りょじんには相当のあたりがついていると見えて、さのみ臆する模様もなく、道に迷うている者の姿とも見えず、ほぼ白骨温泉場の道をたどりたどって、ともかくも、梨ノ木平のあたりを無事に過ぎて、つい、通しの溪流のところまで、さまで深くない雪を踏み分けて、歩み来ったものです。

そうして、つい、通しの橋上にかかる時分になつて、右しようか、左しようかと、ちよつと思案に立ちどまつた時、ふと耳に

さわる物の音を聞きました。

それが例の鈴慕の曲なのです——だが、この旅人は、虚空がどうして、鈴慕がどうしてと、聞きわかるほどの耳を持合わせずに、ただ、笛が鳴る、短笛だ——意外にして意外でないと、足を留めて、耳をすましただけのものであります。

この旅人というのは、まぎれもなき宇津木兵馬であります。

こうして宇津木兵馬は、鈴慕の笛の音に引かされて、白骨の温泉の湯元まで、知らず識らず引寄せられて来ました。

しかし、兵馬がこの温泉場近いところまで来た時分には、笛の音は全く絶えておりました。

その時分、温泉宿の中では、池田良斎と、北原賢次とが、炉辺ろへんで面かおを見合わせ、

「やつぱり鈴慕ですよ、ですがあの鈴慕は、琴古の鈴慕とは少

し違うようです」

と北原賢次がまず言いました。北原は、相当に尺八についてのたしなみがあると見なければなりません。

「なるほど、今のが鈴慕ですか」

良齋が言いました。これを以て見れば、良齋の方は、尺八の音について、さまでの造詣ぞうけいはないものと見てよろしいでしょう。

「鈴慕には違いないと思いますが、少し手が違います、琴古の手とは手が違うが、音そのものに思わず引きつけられました」

「尺八のわからない拙者も、なんだか、こう聞いているうちに、遠いところへ持つて行かれるような気分で、人生の物の哀れとか、悲壯な超人の心の痛みとかいうものに誘われて、ひょう渺とした心持にされていたのが不思議です。いったい誰だい、あれを吹いていたのは」

「左様、村田寛一ではありませんか」

「いいえ、村田ではない、村田は浄瑠璃じょうるりはお天狗だが、尺八の方、あれまではやれまい」

「では市川君」

「市川は、喜多流の仕舞しまいを自慢にしてはいるが、尺八を吹くといったことを聞かない」

「中口ではありませんか」

「中口は、腰折れの悪口こそは言うが、尺八などはわからない男だ」

「そのほかに、われわれの同勢では、あれだけに尺八を吹ける男はありませんね」

「そうさ、もし、ここに君がいなければ、あれは北原だ、と誰も信じて疑わないところだが、あいにく、その当人がここにい

てみればなあ」

「今まで、時々、尺八の音が聞えたようでしたが、われわれ仲間の誰かのすさびと申うて、さまで気にも留めませんでした、今日という今日は問題です、あの尺八の主ぬしが疑問ですよ」

「く、ろ、う、と、の君が聞いて、問題になるほどの腕がありますか」

「く、ろ、う、と、は恐れ入りましたが、今のはかけ出しのわれわれを動かすだけの味は十分です。だが、あれとても決して、く、ろ、う、との吹き方ではありませんでしたね。と申うて、全くのしろうとではありません」

「どうだい、君、ひとつ、ここで合わせてみたらどうだ、ちよ、うど、そこに一管がある、君の堪能たんのうでひとつ、返しを吹いて見給え」

と申うて池田良斎は、壁の一隅に立てかけてあつた一管の笛に

眼をとめました。

誰か湯治客がこの辺で竹を取って、湯治中の消閑しょうかんに、手細工しょうようを試みたものでしょう。それを北原に取らせようと慫慂するのを、北原は首を左右に振って、

「いけません、物笑いですから、よしましうよ」

と受けつけませんでした。本来、北原賢次は、あまり遠慮をしない男で、所望に応じては、ずいぶん臆面なく吹く方ですが、この時は、なにゆえか謙遜してしまいました。

「君にも似合わない」

と良斎から言われても、北原は、

「及びもつかないことです」

と打消しました。

「いやに、イジけてしまったね」

と追究されても、北原は意地を張らず、

「真打ちしんうちが出てしまつたあとに、へボが、わがものがおに飛び出すほど、お笑い草はないでしょう。昔、観世太夫が……」

北原が、自分の笛を吹かない申しわけに、観世太夫へ尻を持つて行くのは飛び離れている、と良斎が思いました。

「観世太夫が、ある時、客に伴われて、とある温泉とうりゅうに逗留したことがあつたと思召せおぼしめ、その隣室に謡好きがあつて、朝夕やか

ましくてたまらないものだから、太夫が客に向つて曰いわく、あの

謡をやめさせてみましようか、どうぞ頼む——そこで観世太夫が朗々として一曲を試むると、隣室の謡がパツタリと止まつた、

その日も、その翌日も、それより以来、隣室では謡の声が始まらない——しかるところ、数日して隣室の客が代ると、また謡がはじまつた、太夫殿、あれをひとつ頼む、先日の伝であれを退

治してもらえまいか、太夫、答えて曰く、あれはいけませぬ、どうして……先日のは下手へたといえども、自ら恥ずることを知るだけの力が出来ている、今度のは言語道断……恥というものを知らないから、拙者の謡を聞いても、逃げないで一層のぼせ、上るに相違ない」

という話を、北原賢次が、池田良斎に向つて物語ると、良斎が、「全く世に度し難きは己おのれを知らざる者と、恥を知らざる者共

だ」

哄然こうぜんとして笑いました。

これでもか、これでもか、といよいよよすりよつて、いよいよその醜があがる。御本人は気がつかないで、そばで見ている時に、気の毒と、滑稽とがあるのみだ。

望まれて、尺八を取ろうともしない北原賢次は、それでも己

れを知るゆ、かしきがあるうというものである。

その時、外の戸を、ホトホトとたたいたものがあります。

「たのみます、おたのみ申します」

これが盛りの時であつたなら、戸をたたいたり、案内を乞うたりするまでのことではないはずなのが、空屋あきや同然の今の場合は、それでも容易に応ずる者が無いものですから、

「たのむ——」

と声も高くなり、たたく音も強くなりましたから、北原賢次がききとが聞咎めて、

「誰だい」

といつて、立とうとはしません。多分、山へ行つた獵師が戻つたものだろう、とは思つたが、獵師ならば、頼むも、頼まないもあつたものではない、大戸をあけて、ここへ入り込んで、両足

を炉縁ろふちに踏込みながら、獲物えものの自慢話をはじめるのが例になっている。

「どなたもおられぬか——案内をたのみますぞや」

「はてな」

全く、この冬籠りふゆごもの一座には、聞きなれぬところの声であるから、北原賢次が、ようやく身を起しかけました。

「おかしいな、全くふりのお客らしいが……出てみよう」

ともかくも、一番先にそれを耳にした人に、出て応対をしてみる責めがあると観念して、北原は立って、

「新助さんかね」

「旅の者でございます、少々尋ねる人があつて、これへ入り込みました」

「何、たずねる人があつて、いまごろ、今時分、ここまでおい

でになつた……」

「御免下さい」

北原賢次が土間へ下りて、ありあわせの草履ぞうりを突っかけて、戸をあけにかかった時、ふと本能的に、自衛の念にかられないでもありません。

秋からかけて、冬籠りふゆごもでさえ異例であるこのところへ、新たに入り込み来る人きた、しかも、まだ深くはないと言いながら、この雪、この夜、人を尋ねるといつて来たその人の正体が、油断ならない。尋ねられるほどの人がここにいるか、もし目ざされるところしたら、われわれこそとりあえず、その最も注意人物でなければならぬ。

そうでなければ、いわゆる、狐狸あいきょうものというようなお愛嬌者が、型の如く人間を笑わせに来たのか、ともかくも、相当の心持であ

けてみる必要がある。ガラリ（戸をあけた音）——  
「これはこれは、不時におたずねして済みませぬ」  
それは存外穏かな、まだ若い旅のさむらい。

四

宇津木兵馬は、北原賢次に案内されて、例の炉辺ろへんまでやって  
来ました。

そこで池田良斎に引合わされ、北原賢次にも改めて挨拶をす  
る。

少しばかり話をしてみた時に、兵馬が、これがこの宿の主人  
か知ら、宿の主人ではあるまい、と感じました。

それにも拘かからず、二人は今、炉にかけて鍋の中から、熟した

甘藷さつまいもを箸でさして突き出して、盆の上に置き並べ、

「さあ、珍しくもありませんが、一つ召上れ」

と兵馬にすすめました。これはふかしたての薯いもではありません、ゆでたての薯であります。

珍しくないと、主人側はことわったけれど、この場所では、非常な珍しい物であるのみならず、かなり飢えていた兵馬にとっては、美快なる食慾をそそるに充分でありましたから、やがて辞儀なしにその薯を取って食べました。

二人もまた、同時にそれを取って食べはじめます。

蓋けだし、この二人が、今まで炉辺を囲んでいた理由は、この薯の熟するを待っていたものでしょう。そこで今度は、珍客としての兵馬を中心に、食べながら話の緒いとぐちが開かれました。

「どちらからおいででござった」

「檜峠というのを越えて参りました」

「して、お国は？」

「数年来、諸国を遍歴して歩きまして、昨日は松本を出発いたしました」

「当地へは、はじめて？」

「全く思いがけぬ旅で、これへ入って参つたと申すよりは、いざなわれて参りました」

「お一人で？」

「中房なかぶさを出る時に、連れが一人ありましたのですが、その連れにはぐれたものですから、それを追いかけるような気分で、つい知らず、この白骨へまぎれ込みました」

「追いかけるような気分で、とおっしゃるのは異様ですな、お連れの方にはぐれてはさだめて御迷惑と存じます」

「連れと言いましても、切つても切れぬ道連れではござりませぬ、ふと中房の温泉で同行を頼まれましたものですから、よんどころなく、一緒には参りましたが、実はどうしてもよい道連れだと存じておりましたところ、離れてみて、はじめて自分の責任を感じたようなわけです」

「ははあ」

「もしや、この宿へ、婦人を連れられた二人のさむらいてい体の男が、参つたような様子はございませんか」

「左様、この数日の間には、左様な来客はございません」

「途中、これは見込違いと存じました、これは到底婦人を連れて来る道ではないと、つくづくそれをさとりましたが、引返すのも心残りで、これまで入り込んでしまいました」

「それはそれは。婦人でも、足の達者なものとは不可能というこ

とはありませんが、それは季節に限つたものです」

「あなた方は、この土地のお方でございますか、それとも、逗留<sup>とまりゆう</sup>のお客なのでございますか」

と兵馬の方から、良齋と賢次とに、問い返してみますと、

「いや、われわれは土地の者ではござらぬ、これでも外来の客でござるが、その外来の客が、主人面<sup>づら</sup>をしているようになっていたらく。十一月になれば、宿のまことの主人をはじめ雇人に至るまで、家の戸を釘づけにして里へ下るところを、われわれが引受けて、留守居<sup>ふゆごも</sup>がてらの冬籠<sup>ふゆごも</sup>りでござります」

と答えたから、兵馬はなるほどと思ひ、なおこの冬籠<sup>ふゆごも</sup>り連も、必ずしもただものではないらしいと思ひました。

「何はともあれ、もう、夜もふけたげに思われます、さだめてお疲れでございましょう、室はこの通りたくさん明いてござる

ゆえ、しかるべきところをえり取りにしてお休み下さい。それ以前、湯槽ゆづねを御案内いたしましたしょう」

北原賢次が、兵馬の疲れを見て取つて、またも自分が案内に立ちました。

好むところの一室を与えられ、夜具も豊かに着せられて、その夜を安らかに寝た宇津木兵馬が、どうしたものか、翌日から頭が重くなりました。おびただしい熱が出たのです。

原因はどこにあるかわかりませんが、広い意味で、傷寒しょうかんの一種といつていいでしょう。それにかかなりの心労もありますからな。

熱が出て、体がわなわなとふるえるものですから、兵馬は、強しいて起きない方がよいと思ひました。幸い、ここは主人の方で取持ちをしようとも、主人に向つて気兼ねの必要のない旅籠屋はたごや

のことですから、よしよし、今日は寝るだけ寝てやろうと思いましたが、

熱もようやく高まるし、体のふるえは、寝ていながら歯の根が鳴るようですが、兵馬は強いて起きないと心をきめたものですから、その中に幾分安んずるの心持もあります。枕元の振分けには、いささか医薬の用意もあるが、それにはまだ手も触れません。

兵馬が度胸を据えて寝ているところへ、北原賢次がやって来ました。

「おや、御病気ですか、それはいけませんなあ」

と北原は早くも、看病する者のなき一人旅の若者に、まず同情の色を見せて近寄ると、

「少し疲れが出たところへ、かぜをひいたものでしょう、たい

したことはありません」

兵馬は寝返りを打つと、北原が、

「それは何かと御不自由でござろう、お待ち下さい、拙者がひとつ、出直して看病に来て上げますから」

「それには及びません」

気軽な北原は、独り合点ひとがてんをして出て行つてしまいました。

兵馬は、この辺で起き上ろうと思いましたが、来て早々、人の厄介になるのは心苦しいと感じたからです。しかし、自分の力で、自分をもてあますほどに、筋肉が結滞しているのを感じました。

若い兵馬は、病気というものを、外気の傷害と見るよりは、自分の不鍛錬の結果と見る人が多いのです。また、今までの教育されぶりが、ほぼそのように教育されておりました。

人の意志が緊張し、精神が充実している時には、病気は近づかないはずである。それが衰えるから病気になるのだ。つまり、外気よりも内心に責任を置いているのだから、病気という時には、まず何物より自分の意志の薄弱を恥ずるのであります。

今も、やはりその廉恥心れんちしんから、兵馬は、無理をして起きなければならぬと感じたのです。かりそめにも、このくらしいのとで、自分で自分の始末ができず、宿へついて早々、人の世話になるといふことの、いさぎよくないのを恥辱として、兵馬は、北原賢次が再度にやって来るまでに、少なくとも床を離れていなければならぬと感じました。

しかし、身を動かしてみると、意外に自分の身体からだのダルさ加減の、いつもと違って甚はなはだしいのに驚かされ、起きて衣裳を改めてはみたが、ほとんど自分の身体が持ち切れないほどのめま

いを感じましたから、じつと心を締めて、形ばかりの床の間に向つて、結跏けっかを組みはじめました。

ここで兵馬は衣裳を改めて、床の間を前に端坐して、この、まだるい、悪寒おかんの、悪熱おねつの身を、正身しょうじんしじつ思実の姿で征服しようと企くわだてたのらしい。

しかし、寝ていてあれほど悪かったものが、起きて襟えりを正して端坐してみたからとて、そう急に納まるべきはずもありません。そう急になおるほどのものとすれば、誰も好んで寝ているものはないでしょう。兵馬はあらゆる緩慢悪寒の不快をこらえて、正身の座を崩しませんでしたが、五体のわなわなとふるえるのを如何いかんともすることができません。

ここで熱い湯を一杯も飲んだなら、そうでなければ冷水の一つも振舞われたら、時にとつてのよい点心てんじんになるかも知れない、

と思つたけれど、あたりに鉄瓶てつびんもなければ、火鉢もない——あ  
あ、やつぱり寝ていた方がいいなと思ひました。

五

そこへ、

「ご免なさいませ」

と入つて来たのは、北原ではなく、髪を洗い髪にして、後ろに  
結んだ妙齡の一人の女の子であります。

「はい」

「おや、もうお起きあそばしましたか、御病氣だそうでござい  
ますが、およろしうございますか」

「ええ、どうやら、よくなりましょう」

「どうやら、よくなりましたよ、というのには、かなり苦しい言  
いわけでしたが、兵馬は事実、苦しい言いわけをするほど苦し  
いらしい。」

「お休みなすつておいであそばせ、北原さんが御看護においで  
なさるとおっしゃるのを、わたしが代つて上りました」

「それはそれは、どうも少し疲れたものですからな」

「ここに、熱いお湯と妙振出しみょうふりだがございますから、熱いのを一  
杯召上つて、お休みなさいませ」

渡りに舟である。病氣そのものが渴望していたところのもの  
を、棚から牡丹餅ぼたんもち的に与えられたことの喜びが、兵馬の苦痛を  
和やわらげずにはおきません。

「では、せつかくの御好意を遠慮なく」

片手をのべて、熱い湯の湯呑を受取ると、グツと一口飲みま

した。この一口の湯が、兵馬の五臓六腑までしみ渡つて、渴する者に水とか湯とかいふ本文通り、一口の湯が全身心に反応しました。

禅家で点心てんじんというが、一片の食を投じて、靈肉の腐乱ふらんを濟すくうという意味通りの役を、この一口の湯が、兵馬のすべてに向つて与えたようです。

「ああ——」

と、甘露かんろにしては少し熱いが、ほんとうに熱い甘露であつたと、兵馬は、つづいて二口三口と飲んで息をつきました。

その間、今これを持って来た娘は、かいがいしく兵馬の後ろに廻つて、兵馬が一旦、まくし上げておいた蒲団ふとんを、再び丁寧ていねいに敷き直した上に、

「これではお寒いでしょう」

と言つて、唐紙からかみをあけて次の間へ入つたと思うと、早くも、二枚ばかりの蒲団を持って来て、その一枚を以前の上へかけ増して、

「どうぞ、お休みあそばせ、無理をしてお悪うございます、ただいま、お火を持って来て上げます、それから朝の御飯は、お粥かゆをこしらえて差上げましょう」

そこで兵馬も、その好意を有難く受けて、

「どうも飛んだお世話になります、ではお言葉に甘えて、粥を少し、こしらえていただきましょうか、それに梅干の二つもあるれば結構でございます」

と答えると、

「よろしうございます、この通りの山の中の冬籠りふゆじもでございますから、お口に合うような物のあるはずはございませんが、何

か見つけて参りましょう。よほどお疲れの御様子でございますから、御無理をなされずに、ゆっくりお休みあそばせ」

為めを思つてすすめるものですから、兵馬もその親切に、我が張る勇もなく、

「それでは、御免を蒙かうむるとして」

彼は再び上着をぬいで、寢床に入ろうとするのをあとにして、娘は出て行きました。

この娘が出て行つたあとで、兵馬は、親切な娘だという感じを催すことを、とめることができませぬ。

それにしても、この宿の女中ではない、この宿の娘か知らん、どうも気分がそうでもないようだ。しからは、人に連れられて、この山の奥に冬籠りをすべく逗留とまりゆしている客のうちの一人か——そうだろう、それに違いない。旅は相身あいみ互たがいで、さいぜんの

男の人が看病に来るといふのを、女の方が看病にふさわしいから、好意で代つて来たものに違いない。とにかく、感じのいい、気分の熟した娘だとは思いやっているが、兵馬は身の苦痛にまぎれて、その娘の面をよく見ておきませんでした。

宇津木兵馬が、この白骨の温泉へ入り込んで来たのは、偶然に似て偶然とはいえませんが。

なかむらぎ中房から意外な女の人と道づれになって、その女を途中でさらわれてしまい、どうでもいいようなものだが、ぼつねん勃然として、思ひあたって、義において見殺しはできないという心から、追いかけて一旦は松本へ出たが、それからハタと思案に余った念頭を暗示するものがあつて、ついにこの白骨の温泉へ入り込んだのです。

そうでなくても兵馬は、中房あたりに行くより先に、この温

泉へ、一文字に突出してみなければならぬはずではあつたのです——というのは、甲州の月見寺で清澄の茂太郎に尋ねた時に、たしかにハッコツという呼び名は聞かされているのです。

ハッコツから一步機転を働かせれば、当然シラホネになるのだから、さてはと、胸を打つて、まつしぐらにこのところへ来て見るのが順序であるべきものを、あちらこちらに停滞漂流していたのは、この機転を働かせるほどに白骨の温泉の名が、人の耳目に熟していなかつたと見なければなりません。

まして、今、ここに來た娘は、あれは月見寺のお雪ちゃんです。

兵馬が、お雪ちゃんの世話になつたのは、今に始まつたことではない。また兵馬も、お雪ちゃんを強盜の危あやうきから救つてやつたこともある浅からぬ因縁いんねんが、ここまでめぐり來たつてい

るといふことを、おたがいこの時は少しもさとりませんでした。

兵馬は、病気の苦痛で人の親切を受けても、その人柄までを、充分に見る余裕はなかつたとはいへ、お雪ちゃんが気がつきそうなものだが、それとても、今時こんなところで、旧知の人を見ようとは想像以外であつたのか、或いは兵馬そのものが、旅疲れでやつれ果て、見違えられていたか、とにかく、充分に因縁のある二人が、ここで、奇遇に驚いて、あつ！ とも、おや！ とも言わなかつたことが不思議でした。

しかし、当然、約束しておいた仕事、火を持つて来ることだの、お粥かゆをこしらへることだの、矢継やつぎ早はやに、この室を重ねて見舞わねばならぬはずになつていますから、今度見えた時こそ、二人の底が割れて、アツとしばし呆あきれ返る幕が見られるはずなの

を、皮肉といおうか、これも偶然といおうか、火と、炭と、お粥とを持って来たものは、約束のお雪ちゃんではなくて、洒然しゃぜんたる北原賢次でありました。しかも、その北原賢次が入り込んで来た時に、宇津木兵馬が眠っていたということも、ゆくりのないことです。

兵馬は熱をとってしまおうとして、用意の薬を熱湯に注いで頓服し、そうして蒲団ふとんの温みにお圧されて、昏睡こんすいてき的に眠りに落ちた時分に、北原賢次はお雪に代って、粥と、火と、炭と、アルバムとを持って来たのですが、兵馬の熟睡を見すまして、そつとそれらのものを枕もとに、程よく配置しておいて、直ぐに出て行つてしまいました。

兵馬が眼をさましたのは、それよりズツト後のことで、ほとんど熱もとれて、頭も軽くなつた気分です、枕もとを見ると、そこ

にかなりに行届いた待遇がしてあるものですから、兵馬は、あの親切な娘さんのしてくれたことだとこの時も感謝の念、と同時に、兵馬は、薬缶やかんや土鍋類どなべとは別にして、左の方の蒲団わきに、見なれない一冊の画帖のあることを認めました。

自分のものでない限り、誰かが来きたつてここにさし置いて行つたものである。誰かというまでもなく、それは、この火と、炭と、薬缶と、土鍋と、茶道具とを持って来てくれた、親切な人——その人が、旅宿の無聊ぶりようと、病気の慰安とを兼ねて、自分のために、この画帖を貸与してくれたのだとは問うまでもなきこととで、兵馬は粥を温めるの手数よりも、その心の慰安がうれしくて、うつぶしに寝返つて画帖に手を触れました。

それは折本になつている布装の書画帖で、中に記されたところのものは、多分、この宿に逗留とまりゆうの客人の、消閑しょうかんの筆のすさび

でありましよう。

まず巻頭に、万葉まんようがな仮名がいつぱいに認めしたたられてあるが、これは、ちよつと読みにくい。

その次が、かなり癖のある強い筆跡で、

子房未虎嘯しぼういま こしやう（子房未だ虎嘯せざりしとき）

破産不為家をさ（産を破り家を為めず）

滄海得壯士そうかい（滄海に壯士を得）

椎秦博浪沙しん つい ばくろうしや（秦を椎す博浪沙）

これは有名な詩であるが、ただ、ちよつと兵馬の目ざわりになつたのは、

我来圯橋上いきやう ほとり（我れ圯橋の上に来り）

懷古欽英風いにし おも（古へを懷ひて英風を欽したふ）

唯見碧流水へきりゆう（唯だ見る碧流の水）

曾無黄石公（曾かつて黄石公こうせきこうなし）

というところの「碧流水」の三字です。

普通は、誰も「ただ見る碧水の流るるを」とか、「ただ碧水の流るるを見る」とか吟じたがり、現に唐詩選にもそのように出ているはずなのを、この筆者は「唯見碧流水」と書いている。碧流水ではおかしい、多分、筆勢のあまりで間違えたのだろう——というように、兵馬は見てしまいました。

その次には、次のような文字が、無む雑ぞう作さに書き飛ばしてある。

敵は大勢

味方は一人

頼むお前は二人

ざれがきではあるが、兵馬はちよつと考えさせられました。

さてその次には、多分ここの温泉風呂の浴槽の写生かと思わ

れるが、かなり心得のある四条風の筆法で、二頁大の一方に、あちら向きの妙齡の裸体美人を描いて（あちら向きだから、面かおは美しいか美しくないかわからないけれども、その姿から見ても、美人といつてもさしつかえなからうと思われる）その左の一面にさん贅をして、「こちら向かんせ、雪の膚はだえが見とうござんす」というようなたわごとが書いてある。

その次には、一人の武骨な男が、得意になつて三味線をひいていると、その前に、鬼とうがらしが唐辛子を持ちながら、しきりに涙を流しているところがある。何の意味だかわからないが、鬼の唐辛子を持つているところが奇抜でもあれば、おかしみもあると思ひました。

その次には、獵師が熊狩をしているところがある。これも四条風の筆法で、前の後向き美人を描いたのと同一人の筆と見え

る。月の輪の大きな熊が、上からのしかかつて来るのを、下にくぐつて槍で突き上げるきわどい瞬間を巧みに描いて、

不入熊穴不獲熊親

と賛がしてある。その次には夜半堂の筆法で、軽妙に近い俳画が描かれて、上に一茶調の俳句が題してある。

大体、そんなような戯画ざれえと楽書らくがきで、ほとんど巻の大半がうずめられていたが、そのうちで兵馬が異様に感じたのは、ただ一つの女文字が所々にはさまれて、それは多くは歌うたが認められている。

歌のことは兵馬にはよくわからないが、手はなかなかよく書いてあると思いました。全くの素人しろうとでは、なかなか色紙しきし、短冊たんざくに乗らないものだが、この女文字は板についていると感じました。

歌も一通り読んでみましたが、いずれも白骨温泉の生活を中心としたもので、山岳をたたえたものもあり、浴中の人事をうたったものもあり、長いものもあり、短いものもあるが、いずれも兵馬の感心するものばかりです。

そうして、どれも最近の墨の香かがするから、この夏の末に去つた人ではない、現にここにいる人のうちの筆のすさびに相違ない、とすればこの女の人は、さいぜん親切に自分を介抱してくれた娘さんだ、あの人に違いない。

宿の娘ではないし、誰か連れがあつて冬籠ふゆごもりをする逗留とまりゆうの客

に違いない。その連れはいずれも相当の教養もあり、風流も解する人だ。旅客で、悪客と隣するのと、好客と泊り合わせるのとは、非常な幸と不幸とであると、兵馬はそんな感じを受けながら見ると、女文字の和歌には、どれにも「雪」という名がし

るしてあります。

六

同じ日の夕方、机竜之助は、炬燵こたつを前にして、端然と腕組みをして首低うなだれていました。

この時は、九曜の紋のついた黒の衣裳で、髪かたちも、さまざまで乱れてはいず、膝は炬燵の中へ入れないで、さながら、お行儀よくお膳に向つた時のような姿勢で坐つています。

尺八は少し離れたところの机の上にあつて、膝のわきには二本の刀が、これも漣とろにながれた筏いかだのようにおだやかに、一室の畳の上に游弋ゆうよくしている。

このごろは、お雪も、久助も、あまりこの室へはおとずれな

いらしい。

それは、この室の主人がそれを好まないせいか、或いは二人が、なるべくこの人に遠のいていた方がいいと感じたものか、どうかすると、どちらも、その存在を忘れてしまっているのではないかと疑われることさえあります。

それでも、一日に一度は思い出したように二人のうちの誰かが、おとずれて見ると、どこへ行ったか姿が見えないことがあります。

それでも気にしないでいると、いつのまにか、おだやかに戻っていて、やがて尺八の音ねがしだしたりするものだから安心してます。

お雪と、久助にさえ、存在を忘れられるくらいだから、まして同宿のほかのものが、聞きとがめたり、見とがめたりするこ

ともなく、ただ、例の尺八の時だけが問題になるのだが、それだつて、この家の一角に左様な人ありて、左様の曲を奏しているとは気がつかず、ただ、その音色ねいろだけが問題になつて、主ぬしはあらぬ方へ持つて行つて、かたづけられてしまうことが多いのであります。

存在を忘れられるということは、死に近づいたことを意味するか、そうでなければ、生に充実しきつて、たたいても、動かしても、音のする余地がない時のことでしょう。

ひとり、この男のみは、死でもなく、生でもなく、存在の間かんに迷溺めいできしていること、昨日も、今日も、変りがありません。

申し忘れたが、この一室にも、やはり角行燈かくあんどんの一基が、炬燵こたつの彼方かなたに物わびしく控えていて、何か話しかければ物を言いたそうに、話しかけないでいれば、先方から物を言いたそうに、

しよんぼりと控えていることでもあります。

尋常ならば、その物欲しげな、ぽっ、かりとあいた口へ火が入つて、待つてましたといわぬばかり、ぽっ、かりと明るくなる時分なのですが、自分の存在にさえ無頓着なこの室の主人が、行燈の存在などに、かまつていられるはずがありません。

冷遇せられたる行燈——これもまた天下にみじめなものの一つであります。清少納言は、すさまじきものの中に「火おこさぬ火桶ひおけ」を数えているが、夕暮になつて火の入らぬ行燈は、それよりも一層、すさまじいものかも知れません。

その、すさまじい行燈でさえが、無聊むりょうと、冷遇と、閑却と、無視との間に、何か一応の怨言うらみごとをさしはさんでみようととして、それで何を恐れてか、それを言い煩わづらうているほどに荒涼なこの一室。つまり、本来ならば、行燈そのものが化けて出そうなこの

夕暮に、御当物ごとうものがつが化けそのうて、身動きもできないで、しょんぼりとすくんでいるこの笑止さが、話にも、絵にもならないのです。

室の主人は、今、腕組みをしている手をほどいてみたが、別段、深い冥想めいそうの底から、安祥として、現世の色界しきかいに戻つて来たという足なみでもなく、そうかといつて、退屈しきつて、所在なさに、四肢の置き場と、顔面筋肉とを、無意味に変化させてみようというのでもない。動いてはじめて存在が知れたような透明な、しかし白濁な色を以て、ちよつと身動きをしてみたまのであります。

腕組みを解くと共に、ちよつとまた小手が動く、するすると座右の刀が膝に上つて来ました。

この人のは、刀を手にとるのではない、合図をすれば刀が膝

に上つて来るのです。ちようど、乳を求むる子が、母の膝に本能的にはい寄るように——そこで刀が膝に上つて来た時は、当然それに乳を与えねばなりません。

刀が膝へ上つた時に、向うの襖ふすまの下へピグミーが現われました。

それは多分、弁信の前へ現われたピグミーと同一眷族けんぞくのものに属するのでしょう。そうでなければ、全く同一物かも知れません。真黒な四肢五体に、長い帽子をかぶつて、帽子もろとも、身のたけが一尺五寸には過ぎないでしょう。

ピグミーは必ずしも悪魔ではありませんが、よく悪魔の真似まねをしたがります。そうでしょう、それは聖賢や、英雄の真似をするよりは、どちらかといえば、その方がガラに合っているのです。だから孔子様も、女子と、ピグミーは養い難しと言う。

悪党がる者には、さほどの悪党はないように、ピグミーがピグミーである間は、単に、いたずら者で、悪魔としても、恐怖すべき悪魔ではないにきまつているが、扱いようによつてはピグミーとて、悪魔がもたらすと同様程度に近いまでの恐怖を、持ち来すかも知れません。

「今晚は——大将、いやに暗いじゃありませんか、明りをつけて、景気よくやらかそうじゃありませんか」

ピグミーはこう言つて、素早く身をおどらせると、早くも行燈あんどんの中へ、上からすつぽりと飛び込んでしまいました。

得たり賢し——多年、冷遇され、閑却され、虐待され、無視されていた角行燈子かくあんどんしは、時を得たりとばかり、パツとあらん限まぶたりの瞼を開きました。しかし不遇の角行燈子が、多年の逆境を

脱して、一時に本能を逞しうするの機会を得たために、多少の

銜気げんきと、我慢と、虚栄と、貪婪どんらんとが併出したと見えて、せつかくの光明に力がありません。光を強調せんとすればするほどに、人をして、一種の哀感を加えしむるに過ぎないほどの光明を、それでも行燈子自身は非常に得意がり、自己眩惑に酔うているようであります。かわいそうに、飢えたる者が酒を飲ませられて、それで腹が満ちたりと喜んでゐる。それよりか悲痛にして、なお滑稽なのは、抜からぬ顔で行燈から出て来たピグミー先生で、得意の鼻をうごめかしながら、

「どうです、この方が、ズツと景気がよいじゃありませんか」  
しかも、机竜之助は何とも答えません。

「先生」

ピグミーは、恐る恐る竜之助の膝の方に近よつて来ました。極めて小さいから、顔面の神経はよくわからないが、その挙動

によつて見ると、何の事だ、人間界の卑怯者と、諂諛てんゆの者とが得てして行いがちの、狡猾こうかつな、細心な、そのくせ、妙に洒然しゃぜんとして打解けたような物ごしで、膝の傍へ寄つて来たが、刀の鞘さやの方から遠廻りをして、腰へ近づいたかと思うと、いきなり、刀の下げ緒の結び目を、両手でしつかりと抑えてしまい、

「エへへへへ」

と、薄気味悪い追従ついで笑いをしました。

「何だ、何をするのだ」

竜之助も、彼が挙動の卑劣さ加減に、呆あきれたものらしい。

「エへへへへ、おあぶのうございますよ、無暗にお抜きになつてはいけません、ただ手入れをなさる分にはかまいませんが」

「あぶないと思つたら、そつちへ寄つていろ」

ピグミーを振り飛ばすと、竜之助の刀が、スルスルと鞘を出

でました。

「さあ、事だ」

もんどり打ったピグミーは、一間ばかりかなたへ飛んで、そこへペタンとかしこまると、さも大仰な表情をして、両手をついたものです。

そんなものには取合わず、竜之助は刀を拭いはじめました。打粉うちこをふつて、例のやわらかな奉書の紙で、無雑作に二度三度拭うているのを、ピグミーは仔細らしくながめて、

「結構なものでございますな、お作は何でございませうか、郷ごうですか、なるほど、郷の義弘でございませうか」

出しゃばり者め、問われもしないに知ったかぶり。

竜之助に取合われないものですからピグミーは、少しばかりテレたが、尺とり虫のように身を屈すると見れば、早くも刀の

手もとまで飛び込んで、竜之助の柄つかを持ってゐる左の手を足場にして、仔細らしく刀身の上をのぞき込み、

「ははあ、五ぐの目め乱みだれと来ていますね、悪い刀じゃありません、いや、どうして結構なものです、ちよつと、この類の程度はありません——誰ですか、相州の五郎入道正宗ですか」

仔細らしく、刃文はもんの匂いにおいのところを見渡しているが、なおいっ  
こう返事がないものですから、

「違いましたか、五郎入道正宗というところは当りませんか、当らずといえども当り同然のところまでは参りませんか、ただし釣合いはいかがですか、それとも否縁いやすじでございませうか」

ピグミーは、え、つ、さ、つ、さをするような形をして、竜之助の手をゆすつてみましたが、やはり返事がないものですから、

「まさか時代違いではございませうまい、こう見えても、新刀と、

古刀ぐらいの差別はわかりますからな——五郎入道正宗でなければ、越中国松倉の住人右馬介義弘うまのすけ——というところはいかがです」

しきりに返答を迫るが、どうしても手答えがないものだから、ピグミーも、いよいよテレきってしまつて、

「何とかおつしやつて下さいな、当りでなければ当り同然とか、否いやでなければ否縁いやすじとか何とかおつしやつて下さらなければ、張合いがございませぬ、相州の五郎入道でなければ、越中の松倉郷、こんなところはいかがです、やつぱりいけませんか」

ピグミーは、竜之助の小手の上で、足拍子を二つ三つ踏みながら、

「尤もつとも……郷と化け物は見たことがない、と人が言いますからな。松倉郷の義弘は享年きょうねん僅か二十七で亡くなりました、天成の

名人でございます、くろうと玄人は正宗以上だと申しますよ。二十七歳で亡くなつて、天下の名刀を残した人ですから、刀を打ちにこの世へ生れて来たようなものです、天才ですね、とてもたまらないものです。郷の義弘には、妙所が八カ所ありますが、それを御存じですか」

ピグミーは、竜之助の、まともに向き直つて、彼を動かすに、天才の感激を以てしようとしましたが、その時、竜之助は、

「時代違いだよ」

と言いました。

「えッ」

ピグミーは、仰山な驚き方をして、

「五郎正宗でなければ、郷の義弘という見立ては違いましたか、当りませんか、否縁までも参りませんか、これは、びっくり敗

亡」

ピグミーは、そこで刀の方に向き直って腕組みをしながらか、しきりに地肌や、沸にえの具合を、ながめ入りましたか、

「時代違いとは恐れ入りました、失礼ながら、もう一度、篤とくと拝見させていただきますか……ええと、長さは二尺二寸五分というところですか、片切刃かたきりばで大切先おおきつさき、無反むぞりに近い大板目おおいためで沸出来にえできと来ていますね、誰が見ても、相州か、そうでなければ相州伝、これが時代違いとあつては惨憺たるものです」

ピグミーは苦心惨憺して、ついに刀の棟へのぼって、その上へ抱きつき、刀の地肌をペロリペロリと二度ばかりなめてみましたが、何かそこで、興に乗じたと見えて、両手で輪を描いて刀の棟にブラ下がり、

「ところで、斬れますかね、これは……切れ味はいかがです、斬

りましたか、どんなものです、三ツ胴どたんばらに土壇どたんばら払いというあたりへ行きましたか？　むろん、最上大業さいじょうおおわざのでございませうな。ところでどうです、生きた人間を斬ると、血がどっちへ飛ぶか、それがわかりですか、斬った人の方へ飛ぶか、斬られた人の方へ飛ぶか……」

調子に乗ったピグミーは、刀の物打ものうちのところまで上って、身を以てからみつけたから竜之助が、その刀を一振り振りました。前にいう通り、ちょうど物打のところへ来て、ピグミーが抱きついて、かなり増長した語気を以て挑いどみ立てたものですから、竜之助が軽くその刀を一振り振ると、

「あっ！」

といってピグミーが、二つになって、壁おもてに向って飛びました。見ると、正面の壁の面おもてに、蟻いもり蝮を二つに斬ってはりつけたよ

うに、ピグミーの身体からだが、胴から上と、下と、一尺ばかり間隔をおいて、二つになつて、へばりついています。

はりついた当座は、ピクピクとして少しばかり動きまじけたけれど、そのまま寂然じやくねんとして、墨汁で点じたもののように、壁にくつついたきりです。

ちようど、その時分、長い廊下で人の足音がしたようですから、竜之助はその足音に耳を傾けました。

廊下の足音は非常に緩慢なもので、且つ忍び足に違いないから、この場合、この人だから、それに耳を傾けたものでしょう。だが、たしかに人が忍んで来ると、こう感づいたのはぜひもないことです。と同時に竜之助は、それがお雪だなと思ひました。お雪が忍んで来て、ここで泣く——それは今宵に始まつたことではない。

お雪の絶望に似た泣く音を、夢うつつの間に竜之助が聞くのも、耳新しいことではない。

その時、またしても、不意にピグミーが襲いかかって来ました。

これより先、二つに斬られて壁にへばりついていたピグミーが、またピクピクと動きはじめたと見れば、いつのまにかそれが一つになって、壁から真一文字に飛んで、再び刀の物打のところへしつかりとかじりつき、

「ね、足音がするでしょう、いつもの足音とは違いますよ、いつもの足音は、一筋にこの部屋へ向いて忍んで来たでしょう、今度のは、あれ、ああして、一間一間をのぞいて歩いて来ますよ、この三階だけでも三十幾間かあるでしょう、それをいちいちああして、忍び忍びに様子を見ながら、だんだんこちらへ近づい

て来る者がありますよ、若い人です、男ですよ、刀を差しています、どのみち、やがてここへやって来ますよ、ここへ来たら事です、さあ、御用心なさい、御用心」

小うるさい！ 再び竜之助が刀を振ると、ピグミーはまたも二つに斬られて、壁へ行つてへバリつきました。

と同時に<sup>あんどん</sup>行燈が消えて、室は真の闇。

七

座敷が暗くなつてから暫くして、短笛の音がこの一室から起りました。

「鈴慕<sup>れいぼ</sup>」を吹いているのです。

この部屋の調子というものが、どうも「鈴慕」を吹くにふさ

わしく出来ているのか知らん。

それとも、習性となつて、手を動かせば尺八が手にさわり、尺八を取れば「鈴慕」が唇頭に上り来るのかも知れません。

とにかく、竜之助はここで「鈴慕」を吹きはじめました。

この男が、竹を鳴らすことに、どれだけの慰安と、一如いちによとを、見出しているのだからそれはわかりません。

また好んで「鈴慕」を吹くといえども、「鈴慕」そのものの曲の示すところが何物であるか、それを味わいつつ吹くのでないことも勿論もちろんでしょう。いわゆる本曲について、見よう見まねのたしなみは持つているというこの男が、「虚霊きょれい」を吹かず「虚空こくう」を吹かず、好んで「鈴慕」を吹きたがるところから見れば、それは何か手ざわりがよくて、虫が好すくといったような、共鳴するところのものがあればこそだろうと思われまます。

「虚霊」は天上の音、おん「虚空」は空中の音、「鈴慕」に至つてはじめて人間の音であります。

行けども行けども地上の旅を行く人間の哀音、そのいづれより来つて、いづれに行くやを知らず、萩のうら風ものさびしく地上を送られ行く人間が、天上の音楽を聞いて、これに合わせんとするあこがれが、すなわち「鈴慕」の音色ではないか。

心は高く霊界を慕えども、足は地上を離るること能わざるそのあこがれ。耳に虚空の妙音の天上にのぼり行くを聞けども、身は片雲へんうんの風にさそわれて漂泊に終る人生の悲哀。無限の空間のうちびように、眇たるうつせみの一身を歩ませて、限りなき時間の波路を、今日も、昨日も、明日も、明後日も、歩み歩みて、曾無ぞうむいちぜん一善のわが身にかかる大能の情けの露に咽むせぶ者でなければ、「鈴慕」の曲の味わいはわかるまい。

けだし、最初の人、靈感うちに湧いてこの曲を作り、第二の人は、曲そのものを学んでその靈感に触れ、第三の人は、曲そのもののようになりて胡盧ころを描く。

知らず、竜之助はそのいずれの人？

かくて「鈴慕」の一曲を吹きすました時に、感激はないが寂寞せきぼくはある。

不意に次の間で、

「ホホホホホ」

という女の声がしましたから、竜之助の眼は本能的に、その笑い声のした方へ向いましたが、もとより何物も見えるのではありません。

「誰だ」

とがめた時に、この一室が月光のような色に冴さえ返って、隔

ての襖ふすまが紗しやのように透きとおりました。

その透きとおる襖をとおして彼方かなたの室を見ると（この時は竜之助のみがそれを見るのです）そこに丸髻まるまげに小紋を着た女房が一人、正面を向いて頻しきりに着物をたたんでいます。

尺八を机の上に置いた竜之助は、

「誰だ、そこにいるのは」

重ねて言葉をかけてみますと、

「ホホホホ」

と、淋しく、愛嬌のある笑みを見せて、こちらは少しも向かずに、以前の通りの形で、しきりに着物をたたみながら、

「たいそうむずかしい曲を、おやりなさいますね」

「なに」

「むずかしくてわかりません、もう少し砕けたのをお聞かせ下

さいな」

「お前に聞かせるつもりで、吹いているのではない」

「それでも同じことなら、もう少しやさしいのを吹いて下さいませんか、そら、いつかのあのし、おの山——あんなのを吹いてお聞かせ下さいましな」

「お前は誰だ、妙なことをいう女だな」

「ホホホ、お見忘れでございますか」

この時はじめてこちらを向いた女は、お浜でありました。

「お前か」

竜之助は無然<sup>ぶぜん</sup>として、うなだれてしまいました。

「あなたという人は、いつでも暢気<sup>のんき</sup>ですねえ」

とお浜は、相変らず着物をたたみながら、あの女特有の、すねるような、怨む<sup>うら</sup>ような、口ぶりが生ける時のそのままです。

「暢気というわけでもないが、仕方がないからさ」

「でも、そうして尺八を吹いて、楽しんでいられるくらいですから、何よりですわ」

「うむ、そういえばそうかも知れない。ところで、お前はそこで何をしているのだ」

「はい、ごらんの通り着物をたたんでおりますが、いくらたたんでも、たたみきれません」

「そうか」

「といって竜之助は、紗しゃのような隔てのふすまから、そちらの座敷をじつと見ました。

紗のようだと思つたのが、いつのまにか御簾みすになつてゐる。

その御簾越しにお浜を見ると、着物を畳んでゐるといふそのしぐさが、どうしても琴を弾じてゐるようになしか見えない。

臍ろうたけた姫君か何かが、相馬の古御所といったような中で、ひとり琴を弾じているような姿にしか見えないから、竜之助は、なんだか夢のうちに、自分の眼の前に錦絵を展開せられたように感じました。そうして、こちらを暢気だとあざけっている、そちらの方が風流至極だと、ひやかしてやりたいような荒涼さでありました。

着物をたたみながら、なお女がつづけて言いました。

「なんだか淋しいから、千鳥かなにかをお聞かせ下さいましな、なんならわたしが琴でお合わせしてもようございます」

「そんなものを吹いちやいられない」

「では、春雨でも、茶音頭でも、なんでもようござんすから、賑やかな、やさしいさびのあるのをお聞かせ下さいましな、追分なんぞも悪くはありませんね」

その時に、竜之助は、尺八は外曲を吹くべきものではない！と、言つてやりたくなりました。でも、そんなことを言つても甲斐がないと思ひ返していると、お浜が、

「ねえ、あなた」

「何だい」

「ごらんあそばせ、この着物を」

そこで竜之助が、遠く離れて御簾越しにお浜の手元をのぞき込んで見たが、畳む手つきは畳む手つきであつて、畳まれる着物は畳まれる着物、特別に異状がありとも思われませんから、

「なんでもないじゃないか」

「まあ、よくごらんあそばせ、畳む着物も、畳む着物も、みんなこの通りでございます」

「どうしたんだい」

見ると、お浜のうしろには、今まで畳み上げた着物が、山のごとく積み重ねてあることを知りました。

だが、この通りでございませぬ、と申して示したこの通りが、どの通りだか、さっぱりわかりませぬ。それをお浜は心得たように、羽二重はぶたえかなにかの長襦袢ながじゅばんの真白なのを一枚だけ取って竜之助に見せますと、それには、べつとりと血がついておりました。

「おわかりになりました？」

「うむ」

「これは地が白いから、わかりますが、黒いのや、紫や、紺地なのは、この血の色がわかりませぬ。わからないけれども、どれとして一つ、血のついていないのは無いのですよ。まだべとべととしめりの来ているのもあります、もう乾いて、ひきはなすとバリバリと音のするのもありますよ。ですから、畳み直すの

に骨が折れて仕方がありません。まあごらん遊ばせ、これなんぞは、こんなに生々なまなましい、さわると手がこの通りでございませう」お浜は畳んでいた小手を上げて、その掌たなごころから、手首から、二の腕のところまで、真紅しんくの血痕が淋漓りんりとして漂うのを示しました。

竜之助は眼を据えて、その血の腕を見つめます。

竜之助は白い眼で、それをじつと、暫く見据えていたが、やがて言いました、

「そんな物を、誰に頼まれてひねくり廻すのだ、早く屑屋くずやに売ってしまえ」

「屑屋だつて買やしませんよ、第一、かかわり合いが怖いって言いますから」

「屑屋も買わないものを、御丁寧しんわに皺しわをのばして、どうしよう

というのだ」

「こうして置いて、まとめて、地獄へ送って上げようと思いま  
す」

「ふふん」

と竜之助があざ笑いました。

この世で屑屋さえ買いたがらないものを、地獄で受取って何にするのだと、口へ出しては言わないで、冷笑を以てむくいま  
した。

「地獄では、こんなのを大変に喜びます」

お浜は負けない気になって、ことさらに誇張したような表情  
で、そのなかの女の着物、自分がいま着ているのとほとんど同  
じもの一枚を取り出して、その袖をひろげて、蝙蝠こうもりのように竜  
之助の方に向け、

「ごらんなきい、これは、わたしのでございますよ、この乳の下に大きな穴があいてございましょう、こんなのを着て行くと、地獄では大変に幅が利ききますのよ」

「……………」

どうも、そう言われてみると、軽蔑と、冷笑とを以てしながらも、それを見ないわけにはゆきません。そこでお浜は、

「芝の山内さんないの松原で、あなたから、こんな目に逢わされてしまいました、この乳の下のがずいぶん深うございますよ、地獄へ来て、かかりのお医者様も驚きました、こういう無残な突き方は無いそうでございます、ですから、ごらんなきい、今でもこの通りなおりません、ひとりでに血が流れて参ります」

この時、お浜かおの面の色が真白にさえきつて、呼吸が少し、ハズんだように見えましたが、その着物を投げ出すとまた向き直つ

て、一心に着物をたたみながら、

「そんなことは、どうでもようござんす、昔のことを繰り返してみたところで、おたがいにいい気持はしませんからね。それよりか、あなたにぜひ一つのお願ひがあるんですよ、これだけは、たつて聞きとどけて下さいまし」

改まつて言い出したが、竜之助は答えませんでした。

「ねえ、あなた」

相も変らずお浜は、着物をたたんでは積み、積んではたたみながら、

「ねえ、あなた、兵馬が今、わたしのところに来ていますが、会つて下さらない」

「兵馬——兵馬とは誰だ」

「ほんとに白々しい、宇津本文之丞の弟ではありませんか」

「ははあ」

「文之丞の弟は、わたしにとつても弟ですよ、弟が、あなたに会いたいといつて、はるばるたずねて来ましたから、会つてやつて下さいな」

「会おう」

「ではここへよびましようか」

といつてお浜は、着物をたたむ手をちよつと休めて、前の方を見込み、

「このなりじゃ、わたしには行けない」

と、本意ほんいない色を現あらわしました。

この時、天井の一角が、けたたましい音をして急に破れたと  
思うと、そこからピグミーの足が二本ブラ下がり、早くもお浜  
の前に飛び下りて小躍こおどりし、

「かたき討がはじまるんですか、それでは僕が行って参りましょう、僕が早速沙汰をして参りましょう、僕が……」

お浜は、さげすむように、ピグミーのはしやぎ立つのを見おろして、

「お前ではいけない」

「どうしてです、どうして僕じゃいけないんです、呼んで参りましょう、かたき討がはじまるんなら、ぜひ僕にも見せて下さい、みんなも見たがるでしょう、ぜひ、ぜひ、僕をお使い下さいな」

「騒々しいねえ！」

お浜は物差を取り直して、ピグミーを横なぐりにすると、そのまま畳の中へ没入してしまいました。

立場を失ったピグミーは、畳の下をくぐって、お雪の寝てい

るその枕もとに現われました。

ここに出没するピグミーは、全く眼の見えない人か、或いは眼が見えても、見えないと同様に、眠っている人にしか現われないらしい。

真黒な細身を、にちやにちやとお雪の枕もとへ摺り寄せて、

「お嬢さん」

と猫撫声ねこなでこえで、

「お嬢さん、よくお寝よつていらつしやいますね」

お雪の眼のさめないのをいいことにして、その枕もとに這はい  
迫り、

「いつも、お一人でここにおやすみになるのですか、お若い  
ちはようございますね、何も知らずやすんでいらつしやる」

言わでものことを言いながら、お雪の寝顔をしげしげと見入

り、にっこり笑つて、立ち上ると、妙な足拍子を取つて、蒲団ふとんの四隅を、八角に廻つて踊りはじめました。

一廻り踊つては寝顔をながめ、また一廻り踊つては寝顔をながめ、自己陶醉の形で踊り狂つていたが、ついには興に乗じて、蒲団の上へ飛び上り、また飛び下り、蒲団の裾へいくつものわなをこしらえ、手を拍うつて喜んでみたが、やがて、それにも飽きたと見え、物珍しそうに、この部屋の天井の隅から畳の溝までも見わたすと、忽たちまち身を躍おどらして、吊棚つりだなの上へ飛びあがりました。

ピグミーは探し事を好むらしい。人のすきに乗じて、人の気のつかないところを笑つてみて、何かその間に獲物えものを得ること  
を以て、この上なき誇りとするらしい。やっぱり物好きは暗い  
ところにある。

だが、不幸にして吊棚の上には、その好奇心の餌食になるべき何物も見出せなかつたらしく、今度は身を軽く、吊棚から戸棚の透間へ入り込んで、しきりに音をさせていたが、そこでも思わしいものを発見し得なかつたと覺しく、失望の色をたたえて立ち出で、最後に見出したのは、お雪の枕許まくらもとの手文庫です。

その蓋ふたをあけて、取り出した一巻の紙きれ——さてこそ、さてこそ、とほくそ笑みした。ピグミーは、それを行燈の下へ持つて来て繰りひろげて、ひとり合点がてんに、痛快の色を面おもてに現わしました。

多分、ここにおいて、はじめて秘密のものを発見し得た、これを此方こつちのものにしておいて、これさえつきつければ一言もあるまい、その弱点を押えて、哀願する態度を見てやれば胸が透く——と、こんなふうにとったのかも知れません。

なるほど、そこには、やさしい女文字の水茎みずくきのあとが、長々と紙の上にたなびいている。こういう手紙を人に知らさず認めて、胸を躍らせながら、やりとりすることは憎い！

しかし、御安心ください。この場合、この水茎のあとは、少しもピグミーの好奇、嫉妬、呪詛じゆそを満たすべき何物でもありませんでした。

それはお雪から、毎日、日課のようにして弁信にあてて書く手紙です。

「弁信さん——

どうしたのでしょうか、このごろになって、この温泉へ、お客様が不意に殖え出してきましたのよ。

昨日は、またお若い旅のさむらいが、夜中においでになったかと思うと、今日はまた、そのお連れであるらしい二人連れ

のさむらいがおいでになりました。

前に見えた、若いお方は、なんとなしお痛わしいような、初心うぶなところがありませんたけれど、あとから来た二人のお方は、なんだか気味の悪いお方です。

一人は、筋骨の逞たくましい武芸者のようなお方、もう一人は、お医者さんの修業でもなさろうというような風采ふうさいの書生さんですが——いま考えてみると、二人とも、どうも、どこやらでお目にかかったようなお方です……」

八

それはそうと、一方において、その晩、宇津木兵馬がかなり忍びやかに、この三階まで入り込んだことは事実であります。

そうして、ここはと思われるような部屋部屋を、逐一ちくいちにのぞき廻めぐつていたことも事実であります。

好んで探偵眼を働かせるわけではないが、本来、この人は入湯に來たのではなく、人をたずね求めに來たのであります。

そのたずね求める人というのは、主流には兄の仇であり、傍流にはかり、そめの道連れの女の人であります。

前の者は身命を賭として、探さんとする目的ではあるが、後の者はどうでもいいのである。

どうでもいいよりは、そんな者にかかわり合いをつけない方がいいのである。

だがしかし、世間のこと、人生のことというものは、求めんとするものほど來きたらず、求めざらんとするものほど近やすより易いもので、そこで、中房の温泉でも、こうして宿屋の間毎間毎を

探し試みているうちに、蒲団ふとんの罫とりでの中で見つけなくてもいい仇あだし女を見つけてしまいました。それが縁で、今はその女をも何とか先途せんどを見届けてやらないことには、自分の良心にやましいような事態となりました。

そこで、まだややものうい身体を運んで、片手には一刀を携え、そうしてこの間毎間毎を忍びやかに探りながら来たのであるが、一体に人間臭の無いことは中房以上です。

兵馬はさもあるべきことと一巡しながら、廊下を半ばまで来た時分に、短笛の音ねが起りました。尺八の声です。実は前の晩も、この尺八の声に引寄せられて来たような姿でした。それが今、不意に、しかしながら、極めてしめやかに起ったのは、つい自分の行手の、鍵の手になった廊下の奥の一間からであります。

この物音に、兵馬が足を踏みとどめました。

それが何の曲ということ、兵馬は知らない。

ただ第一に、気を取られたのは、心なく、人の清興を妨げてはならないということでした。

第二に、少なくともこの場合、自分の行動が紳士的でないというようなことを考えました。つまり、無下むげに来るべきところでないところへ入りこんだのは、先方から何かの疑惑をかけられても仕方がない立場だから、これより以上は一步も進まないで、その清興の人の心を、かりそめにも動かさず、静かにもと来し道へ帰るのが礼ではないか、と思いましたが、ものですから、ちよつと行き悩みました。

しかし、兵馬が、こんな思案をして、用心して、引返そうとしているうちに、尺八の一曲も終つたと見えて、また、ひつそりした天地にかえつたものですから、それならば、いつそ、こ

こをずっと突きぬけて、いま尺八の音のしたあたりの部屋の前をも通り過ぎて、廊下のはずれから二階へ下りて、自分の部屋へ帰った方がよかろうと思案を改めます。

つまり、尺八を吹き鳴らしている間こそ、人の清興をさまたげては悪いという遠慮気兼ねもあるが、それが済んでしまつてさえみれば、さりげなき体ていで、尋常の通行人として、その通り去り、通り来る分きたには、何の憚はばかるところもあるべきはずがない。

そのように思案を改めたものですから、兵馬はそれから忍び足もせず、間毎間毎をうかがうような振舞もせず、尋常に足音を立てて廊下を歩んで、志す方へと行きましたが、不思議なことには、たしか、ただいまの尺八の音の起つたのは、この辺でなければならぬと思われるところあたりに、一向、燈火ともしびの影がないことです。

尺八の音がするのだから、音をさせる人がいるに相違ない。音をさせる人がいる以上は、その部屋があるに相違ない。夜分、部屋に坐つて尺八でも吹こうという人が、燈火あかりもつけないでいるはずはない。不意にその火が消えたとすれば、多少狼狽ろうばいの氣味が見えなければならぬのに、そんな氣けぶりは微塵みじんもないし、たつたいま尺八を吹いたばかりで、もう燈火を消して寝込んでしまつたとも思われない。

兵馬は、変なところへ引込まれたような氣になりました。

そこで兵馬は、茫然ぼうぼうぜんとして自失するの思いです。蹶音あしおとに導かれて、かえつて無人の曠野こうやへ連れて来られたような心持を如何いかんともすることができません。

今の先、尺八の音のした室の前をも、兵馬は通るには通つたのです。それも、忍びやかに通つたのではなく、堂々と通り過

ぎたのだが、人の気配を、どうしても感得することができずに  
しまいました。

そうして、自分の部屋へ帰つて来て見ると、六曲屏風びようぶが一つ、  
自分の寢床の前に立てめぐらしてありました。

まあ、すべてにおいて、入りかわり立ちかわり、親切と好意  
を示してくれる人がある。

ひとりひと寝の旅の枕が寒かろうとして、屏風を持つて来て貸して  
くれたのは、宿屋が客に対する商売気の親切ではなく、同宿の  
冬籠りふゆごもの客同士の思いやりから出ているのだ。

有難いと思つて、もうかなり更あんどんけていることでもあるから――  
但しこの座敷には、最初から行燈あんどんの火が細目にしてあつたもの  
です。衣服を改めて、遠慮なく寢床の中へ飛び込んでしまいま  
した。

で、かなり勢いよく床について、燈火を消してしまおうとする途端に、その六曲屏風には、一面に墨絵の竹が描いてあるなと思ひました。それは墨竹ではなく、全体に竹藪たけやぶとして描かれてあるもののようにでしたが、それを認めた途端に、燈火ともしびを消してしまつたから、自然、まもなく眠りに落ちた時の兵馬の夢が、竹藪に入つて行くのはぜひもないことです。

絵に見たのは墨絵でしたが、夢の中では、兵馬は、真蒼まつさおな、限りも知られぬ竹藪の中に彷徨ほうこうしているところの自分を発見しました。

どうも困つたものだ、和藤内わとうないではないが、行けども行けども藪の中。

こんなところへ迷い込んで来るつもりはなかつたのだが、どうも仕方がない。

迷いこんでみれば、歩くだけ歩いて、抜けるところへ抜けなければならぬのだ——と、歩いているというよりは、やはり彷徨しきしているうちに、藪の中で一人のおやじが頻りに竹を切っている。

何をするかと見ると、竹を切っては頻りに尺八を取っているらしいから、兵馬が夢のうちで、何だ、あんまりこしらえ過ぎる、宵に尺八の音を聞いたからといって、ここで尺八を見せなくつてもよかりそうなものを、夢にしても、あんまり幼稚な複写だと、夢中に夢を評するような心持で、その前を通り過ぎたが、やはり竹藪で、兵馬は尺八だけは、夢中に夢を観ずる気持で見ましたけれど、竹藪の中を歩いている夢は、やはり夢ではない、うつつの彷徨ほうこうでありました。

そうして、ともかくも夜もすがら兵馬は、竹藪の中を歩きつ

づけてゐる夢を見て、暁に徹しました。

今までいろいろの夢も見たが、一晩中、竹藪の中をさまよいつづけている夢を見通したのは初めてだ。そこで、鶏の声が聞えたから、はあ、もう占めたものだと言つたもので、ホッと息をついてみると、どこかで荒らかに戸をたたき、

「兵馬、兵馬、宇津木兵馬が、もしやこのところに来てはいないか、仏頂寺弥助と、丸山勇仙がやつてきたよ」

すわ！ と夢うつつのさかいを破られました。来たな、どの面<sup>つら</sup>下げて何といつて来たか。亡者<sup>もうじや</sup>とは言いながら、よくかぎつけて来たものだ。こうなつてみると、どつちが先走りをしたものかわからない。

だが、あのいけ<sup>しやく</sup>凶々しいおとないぶりを見ても、このまま飛び出して対面してやるのも癪だ、竹林は抜けて鶏の音は聞いた

が、実はまだ眠いのだ、よし、もう一寝入りして、奴等の氣を腐らせてやれと、兵馬も相手が相手だけに、兵馬としては似合わしからぬ、狸寝入りを試みているうちに本物になって、寝耳のところ、

「兵馬、仏頂寺と、丸山が来たよ、いるんなら起きて出迎えろ」  
それをうとうとと小気味よく聞き捨てて、やはり夢うつつのところを彷徨しています。

九

その翌日は、白骨温泉の炉辺閑話に、変ったかおぶ面触れが一つ現われしました。

それは仏頂寺弥助でも、丸山勇仙でもなく、無名沼ななしぬまのほとり

の、あみしや 燈小屋の神主が来たのであります。神主は山へ登ることは登るが、ここへ下りて来ることは極めて稀れであります。

そこで炉辺が、この珍客を迎えて賑にぎわいました。

炉辺閑談といううちに、ここへ集まる定連じょうれんのかおぶれを、ざつと記して置きましょう。

国学者兼神楽師

池田良斎

その一行

北原賢次

同

村田寛一

同

中口佐吉

同

堤一郎

同

町田政二

俳諧師

柳水

画師

木川宗舟

甲州上野原

久助

同

お雪

山の通人

吉造

山の案内

茂八

温泉留守番

嘉七

猟師

十太郎

同

良太

だいたい、こんなかおぶ面触れで、定刻に至ると閑談の席が、開かれるのです。

定刻というのが、必ずしもきまつた時刻という意味ではなく、まず退屈の者が二人ばかり炉辺へたかつて、火を焚きながら、むぞうさ無雑作に話のきつかけを作ると、それが緒いとぐちとなり、炉の火が燃えさかると同時に、話がはずみ、話がはずむにつれて人が集ま

り、おのずから全員出揃いとなつて、そうして、相当に節度あり、進退のある閑談の蓆むしろが開かれるのですから、人の集まる時がすなわち定刻で、それは晴雨によつて、人々の仕事都合によつて、おのずから変化します。

今日は、お正午ひる少し過ぎに、山の神主が来たものですから、すなわちその時が会議の定刻となりました。山の神主は例によつて、えびす様そのもののような笑顔をたたえきつて、もろもろの話をはじめました。

下で神主が、もろもろの話をはじめている時分、宇津木兵馬は二階で日記を書いておりました。

兵馬に感心なのは旅日記を書くことで、不可抗力の際でもなければ、曾かつてこれを怠るといふことがありません。

ただ一つの惜しいのは、喜多川季莊ほどの考証癖があるか、

せめてお雪ちゃんほどの文才があれば、この旅日記そのものが、後に残るほどの文献となつたかも知れませんが、この点において兵馬は全く不用意であり、子孫に伝えようの、後世に残そうのという銜てらい気味は少しもなく、ただ今日の心覚えを、明日の参考にとどめておく、金銭出入帳に毛の生えた程度のものに過ぎないのですが、書いていけば、日課としてそれをしなければ、朝起きて面かおを洗わなかつた時のように、一種の不愉快を伴うほどの習慣になつていゝのです。

「白骨ノ温泉ニ到着ス

病氣

コノ地、秋ヨリ冬ニカケテハ、旅宿ハ戸ヲ釘ツケニシテ里  
ニ去ル例ナレドモ、今年ハ珍シク冬籠ふゆごもリノ客多数居残リヲレ  
リ……」

といった程度の記事で、歌もなければ、ほつく発句もない。文学的感傷めいたひらめきは一つも現われて来ないのだから、問題になりません。

「病氣程無く快癒

昨夜三階ノ一室二人有ルガ如ク、無キガ如キ思ヒス、尺八ノ音起リテたちま忽チヤム

明日、コノ処ヲ発足センカ、マタハモ暫ク逗留センカ、未いまダ決心セズ」

というようなことを書いて、さて兵馬は、これから下へ行つて炉辺閑談の席へ加わろうか、また入浴に行こうか、と思案したが、やがて手拭を持ってズカズカと出かけたところを見れば、閑談の席へは行かず、入浴を志したものでしょう。

兵馬が手拭を下げて出て行つたあとへ、お雪が入つて来まし

た。

炬燵こたつへ火を入れて上げようとして来て見ると主ぬしがいないので、失望しましたが、鉄瓶にお湯があるかないか、お茶道具が揃っているかいないかというようなことを、ちよつと調べながら、机の上を見ると、半紙四つ折りの日記帳あが開けつぱなしになって、その間に筆がはさんでありますから、お雪は見る気もなく、それをのぞいて見ました。

物を書くことの好きな、歌をつくることの好きなお雪は、このお客様も筆と紙とを、旅枕にも放さぬ人であつてみれば、また同好の風流を話せる人ではないか、というような好奇心もあつたものでしょう。

のぞけば、おのずから、読めるようになっていたのだから、それを読んでみると、前にいう通りの棒書きで、歌もなければ詩

もない。わが胸の燃ゆる思いに比ぶれば、焼ヶ岳の煙が薄いと  
か厚いとかいうこともなし、信濃の国の白骨となん呼べるい、で  
ゆに遊びてしかじか、と書いてあるのででもない、いわば小遣帳こづかいちよう  
の出来のいいような、徹底的に実用向きの書き方だから失望し  
ました。

室に置きっぱなしで行った、衣服旅装のたぐいといえども、  
それに準ずるもので、風流や、しゃれや、にやけという気分は  
微塵みじんもなく、質実な武家出の旅の若者のかいがいしい武骨さが  
あるばかりであります。

それでもお雪には、なんとなく人懐かしい。ただでさえ人懐  
かしいと思うところに、新たに来た人といえは、それだけで一  
層懐かしい。ましてこれはここにいる客人のうちで最も若い人  
ではあり、その若い人が何の用向か知らないが、今時分、たつ

た一人で、こんなところまで踏み込んだのは、よくよくのこと  
でなければならぬし、そのよくよくの場合に病みついたなん  
ぞということ、お雪の感傷的な同情深い女性的の半面を呼び  
起すにもかなり有力です。

どうも、済まないような気持ちになりながら、お雪は、その、開  
けっぱなしにしてある部分だけでなく、もう二三枚ずつさかの  
ぼって、それを読んでみたい気になりました。

気になったのではない、もう読んでいるのです。

しかし、なんらの、そこにセンセーションを呼び起すべき記  
事を発見することができません。相変らずの棒書きで、小遣帳こづかいちよう  
に毛の生えたようなもので、自然と風景の批評もなければ、人  
情と土地柄の研究もありはしない。たまにあるとすれば、どこ  
はどこに比して、人間が親切だとか、宿賃が比較的安い、といっ

たような簡単なもので、無理にも盗み見の興を催させるような記事は一つもない。

だが、お雪が、もう少し凶々しく構えて、いつそのこと、机の前に全く膝をつつこんで、お尻を据えてしまつて、逆にでも、順にでもいいから、帳面を根本的に読みのぼつて行つたなら、俄然<sup>がぜん</sup>として、驚くべきことを発見したに相違ありません。

この俄然として驚くべき発見というのは、この日記の主<sup>ぬし</sup>が、現に、自分の甲州の上野原の月見寺に少しの間ながら逗留していたということ。

それを逗留させたのは他人ではなく、こうして現に盗み見をしている自分であること。

そうして、あの時分の出来事が、これと同じように平々淡々たる棒書きで、このうちのあるページの記事として見られると

いうこと。それらを発見して——この娘が人から多く愛せられ、人をも愛することの多いこの娘が、全く路傍の人ではなかつたことを、この時、この際に発見し得たなら、驚き喜ぶに相違ありません。

ところが、お雪には、それほど凶々しくはなれなかつたのです。ほんののぞき見に、うわつらだけを知らん面かおをして見て置く分にはいいとしても、それを二三枚さかのぼって見たことすらが、いくぶん良心が咎とがめているのに、尻を据えて、凶々しく盗み見をしてやろうなんぞとは、お雪にはできません。そのままにはして置いたが、なんとなく心残りがありません。そこでお雪は、思い出したように兵馬の身の廻りを取りかたづけて、脱ぎっぱなしにしてあつた衣類などを畳んでやりました。

それは気のせいばかりではありませんまい、お雪のこのごろは、目立って分別の面おもだちになりました。誰も気軽にお雪ちゃんとはいえないほどに、老ふけたというではないが、沈んだところがありありと見えます。それも、ただ沈んだのではなく、どうでもなるようにといったような、軽い放任気味が見えないということはない。

着物を畳み終つて押入に入れてから、お雪はこの部屋を掃除し上げたがよいか、このままにして置いた方がいかと、ちよつと考えさせられたようです。あまり要らぬ世話を焼き過ぎてもよくないし、そうかといつて、このままに置けば、いつ誰が来ほうきて箒を当てるか知れたものではありません。ちよつと思まじ惑うて、お雪は障子の戸をあけて外を見ますと、思いがけない、すばらしいながめを見ることができました。

白骨の温泉場は谷底のようなところですからすけれども、見上ぐるところの峰巒ほうらんに、それぞれの風景を見られないということはありません。

今は雪です。雪が今日はめざましいほど降り積って、四周まわりの山を覆うているのを見ました。お雪がこんなに打たれるほど、見慣れたこの風景をめざましいと思つたのは、近頃、たれこめて、久しく戸の外を見なかつたせいでしょう。

このすばらしい雪の景色を見ると、雪におしくだ圧下される冬の恐怖よりも、雪に包まれた自然の美しさを歌いたい気になりました。屋根の垂木たるき、廊の勾欄こうらんまでが、雪とうつり合つて面白い。浴室の窓まどから、湯煙の立ちのぼるのも面白い。湯滝の音が、とうとうと鳴るのも歌になると思ひました。

そこでお雪が暫くの間、うつとりとしました。我を忘るる時

は、歌を思ふ時でしょう。

さて、自分は歌わんとしてまだ歌をなさないが、清澄の茂太郎ならば、早速何か歌うだろう。何だか耳もとで茂太郎の声を  
するようであらぬ。

その時、どつと下の方で笑い崩るる声がありました。ああ、そうそう、今日は珍しくあふみしや鏡小屋の神主さんが来られたそうで、廊下で先ごろ北原さんから案内を受けたが、行く気にならないものだから御無沙汰ごぶさたをしてしまった。

あの晴れ晴れした、賑やかな神主さんが、ざもち座持で話をしていれば、一座が陽気になるのも無理はない。ああして、さも愉快そうに笑い崩るる声。下の明るい賑やかさ。

それを聞いて、いつもの自分ならば、駈けつけて行っても、仲間になりたいほどのものを、なんだか行きたい気が起らないの

みならず、人々の笑い崩れるのが、どうやら呪わしいような心持になつて行く自分はどうしたものだろう。気が進まない。

お雪は、晴れ晴れしい神主のことから、かえつて暗い気持を、自分の胸に感得しました。

ああ、いやいや、あの賑やかな神主さんを思うと、その裏には、あの死神にとりつかれた浅吉さんのことを思う。締め殺しても死にそうもなかつたイヤなおばさんのことを思う。その二人のいずれもが、なんとも原因不明な死様しにざまをしてしまった。死んだとは思われない。ことに、あのイヤなおばさん、はちきれほど脂あぶらたつぷりなおばさんが、もろくも魂こんに引かれ死んでしまった。あの神主さんこそは、その二人の陰気とけがれとを、極力払いのけようと、忠告もしたり、手きびしいお祓はらいもしたりしたのを、お雪はよく知っている。

けがれは「けがれ気枯」である。陽気が枯れるところに罪悪が宿る、罪悪の宿るところに死が見舞う——とは、常々聞かされたあの神主さんのお説教の論法である。

今のわたしは、その通りに、陽気が日に日に枯れて、陰気が時々刻々に加わってゆくのではないか——明るいところを厭うようになる時は、暗いのを好みはじめる時である。たまらない。お雪は目がくらくらとしました。

十

宇津木兵馬は、ひとり温泉の中に仰向けになつてゆうゆう悠々と浸つて、うつとり恍然と物を考えているところへ、不意に後光がころげ込んできました。

なんとにぎにぎいう賑々しい人だろう。人間としては、たった一人が入り込んで来たのに過ぎないが、四方がパツと明るくなるほどに陽気になりました。

兵馬も知らない、入つて来た方も知らないが、これはあぶみごや鐙小屋の神主さんです。

鐙小屋の神主さんは、たった今、炉辺の閑談を済まして、いち早く、ひとりこの風呂に飛び込んで来たものと見えます。

お雪が二階で聞いた、どつと笑い崩るる音というのは、この陽気な神主さんが、何か一席の座談の終りにあいきょう愛嬌ある落ちをつけて、それが、すべての人のおとがいを解いたその結果でありますしょう。

先入りの客がいたと見て、神主さんから言葉をかけました、「おやおや、あんたお一人で、そこにおいでかい。いつ来ても

このお湯はいいお湯じゃの、よくまあ透明に澄んでおりますわいの。これまあ、玉のこぼるるようじゃ、勿体ないほどじゃ」と言いながら兵馬と向い合つて、ズブリと全身を湯の中に打込みました。

「白骨と申しますが全く骨まで白く洗えそうな湯ですな」と兵馬が、おとなしく言うのを、

「その通り、その通り、ほんに綺麗きれいでいい加減で、それに今は混む時のようにさわがしくはないし、お湯に入る気持は格別だが、若衆わかしゅさま、修行は湯ではいけませんぞ、水に限りますぞ」と、その人が言い出したものですから、この男を神主とも、行者とも知らない兵馬は、変なことを言う人だと思いました。

「修行は水に限ったものです、厳寒に、氷を割つて浴びる水の温かさを知つたものでなければ、修行の味は話せませんよ」

神主がいうのを、兵馬は軽く、

「そうですかなあ」

と受けたままです。ところが神主は面かおだけは洗わないで、ゴシからだ身体を湯の中でこすりながら、

「万事、水で修行をしなければいけません。しかし、それもまあ身体に準じたもので、無茶あらぎように荒行をやるのも感心しませんな。

あんた方かんじんなんぞはまだ若いので、少しぐらい無理をしても修行が肝腎かんじんですな。水行と断食のことですよ、水行と断食をしつかりやつとらんことにや、身体の本当の鍛えはできませんわい」

兵馬はそれを聞いて、ますます変だと思いました。この男は人を見かけに頭から説法する人だ、その説教を独断的に頭から押しつける人だ、ははあ、この山中に來ている行者たぐいの類たぐいだな——と兵馬は、そう気がついたものですから反問しました、

「もう永く、こちらに御逗留ごとうりゆうですか」

「長いといえば長うがすな、この乗鞍ふもとの麓ふもとに落ちついてから二十年にもなりますかな、昨今では、もう全く山の人になりきつて、人里へ出ようという気になりませんわい」

「二十年——ずいぶん、長いことですなあ、どちらにお宿をお取りです」

「ははあ、あんた、いつこつちへおいでなすつた」

「昨日参りました」

「そうでござんしよう、そうでなければ、とうにわしの事は聞きいておいでのはずじゃ。わしはな、この上の無名沼みなしぬまのほとりのあふみや鏡小屋あふみやというのにいる神主でござんすよ」

「ははあ、そうでしたか、まだよく存じませんものですから」  
「遊びにおいでなさい、ここからホンの一足ですから。一足と

は言いながら、それは平常ふだんの日のことで、雪の積った時には、その一足が、常の人で二刻ふたときかかりますよ。おいでなさい、焚火をしてあたらせながら、山の話をして上げましょう」

この神主はそれから兵馬を相手に、自分も若い時分は、さんざんに諸国を廻つて、あらゆる世間に接して来たという自慢話をはじめましたが、そのうちに、

「山という山はたいてい歩きましたね、日本国中の有名な山という山には、たいてい一度はお見舞を致しましたが、なんにしても山といつては、この信州に限つたものです。富士は一つ山ですから、上つて下つてしまえば、それつきりですが、信濃から飛驒、越中、加賀へかけての山ときては、山の奥底がわかりませんからな。尤も毛唐人もつと けとうじんにいわせると——毛唐人といつては穩かでないが、西洋の人ですな、長崎で西洋の山好きに逢いまして

な、その男に聞きますとな、感心なもので、あの西洋人の山好きは、日本人の歩かない山を歩いていましたよ、この辺の山のことでもなんでもよく知っているには驚かされましたよ。ウエストとかなんとかいう名の男でしてね、それが、あんた、日本人がまだ名も知らねえ、この信濃の奥の山のことなんぞをくわしく話し出されるものだから、若い時分のことですから、すっかり面食めんくらつてしまいましたね。その西洋の山好きの男が言うことには、日本はさすがに山岳国だけあつて、山の風景はたいしたものには相違ないが、それでも、高さからいっても、規模からいっても、西洋の国々に類の無いというほどのものではない、世界中にはまだまだ高いのや、変つたのがいくらもあるが、そのうちでも、ちよつと類の無いのは、肥後の国の阿蘇山あそざんだつてこう言いましたよ」

神主さんはこう言つて、からだ身体を湯の中でまたゴシゴシとこすりました。

そうして神主が、また言葉をついで言いました、

「肥後の阿蘇という山は、全く、世界中でも類の無い山だと毛唐人が言いましたから確かでしょう、この辺の山と違って、火山の外輪というのが素敵でしてな。火を噴く山としては、この上の焼ヶ岳なんぞも日本の国では、どこへ出しても引けは取らない山ですが、阿蘇とは規模において比較になりませんなあ。二十里というものが、人工で出来た壁のように、早い話が支那の万里の長城みたいに、ずうつと並んで連互れんこうしているんですから素敵なものです、この規模だけは世界に類が無いと西洋人が驚きます。まあ、折があつたら一度のぼつて御覧なさいまし」

阿蘇を讚美するかと思うと、今度は一転して温泉のことに逆

戻りをして、

「修行は水に限るがの、気分のうのうの暢々するのは、何ととっても温泉に限ったものですね。その温泉も、平地の温泉よりは、山の奥の温泉ほどいいですね。山の奥の温泉も、こんな湯槽の温泉よりも、野天の源泉、川の岸、巖の間といったのへ湧き出るそのところを湯壺にして、青天井の下で湯あみをするの愉快に越したことはありません。何しろ日本という国は、温泉がふんだんにありますからなあ、この点ではまことに合せな国に生れたものですよ。つばくろ燕の下の中房へ行きましたか。ああ、そうですか。この近所では、飛驒ひらゆの平湯の温泉、蒲田峠がまだとうげの蒲田の温泉というの、それから上高地の温泉も、これを山の裾越しに北へ行くと、あんまり遠くないところにあります。どうです、ひとつその上高地の温泉へ御案内をしましょうか。なあに、まだ雪もそんな

に深くはなし、ここへ冬籠りふゆごもをするよりは、また奥深くていつ  
そう面白いですよ。帰りたけりや、いつでも帰れますよ。雪が  
深けりや深いように、歩き方もあるにやあります、だが、山は  
慣れないうちは、もう全く案内者のいう通りにならないとあぶ  
のうござんすよ、血氣にまかせてはなりません。ひとつ乗鞍ヶ  
岳へ案内をして、朝日権現の御来光の有難いところを拝ませて  
進ぜましようか。とにかく、ゆつくり御逗留ごとうりゆうでしたら、遊びに  
おいで下さい、梨木平なしのきだいらというのを通つて無名沼ななしぬまへ出ると、その  
沼のほとりにわたしの小屋が見えます。誰がつけましたか、乗  
鞍ヶ岳の下の、鐙小屋と人の呼びならわすのがそれで……」

これより先、仏頂寺弥助と、丸山勇仙とは、兵馬の座敷へ入り込んで、火鉢を中に鶏肉を煮ながら、酒を酌み交わしておりました。

この鶏肉と、酒とは、どこで得たものかわかりません。どうも二人御持参の品らしい。御持参とすれば、どこからどうして持つて来たかというようなことの詮索せんさくはやめましょう。とにかく、この宿へ来て、しかも、兵馬の入浴中を見はからつて侵入して来たような、変則の来客でありながら、酒と、鶏肉だけは、こうもあざやかに、この宿で即座にととのえ得る理由が無い。ですから多分、充分の用意をして持参して来たものであり、同時に、兵馬のように、ほとんど偶然に近く誘引されて来たというのでなく、たしかに痕跡をつきとめて、後の先を制したようなつもりで、抜かりなくこの座敷を、あるじの不在中に占領し

た得意面が、明らかに見得るのであります。

ところで二人が、酒を飲み、鶏肉を食いながら、どんな話をしているかと聞くと、

「どうも、ありや見たような女だよ」

と丸山勇仙が言いました。やはり話題は女のことでありました。「左様さ、たしか拙者といえども見たことの覚えのないとはいえない代物だ」しろもの

と仏頂寺弥助が合ませます。ここで話頭に上すまでもない、女のことゆえに、兵馬をしてよけいな焦躁をさせている二人。その事とはまた別に、話題が女のことになるのは、あれよりは近く、ここへ来る途中でか、或いはモット近く、問題になるべき女の印象が現われたものと見なければならぬ。

「この宿の娘とは見えない、女中ではなおさらない——だから、

ここに逗留とくりゆうする客の一人と見なければなるまい。珍しく、こんな奥山ふゆごもに冬籠りをするらしい客がかなり多いようだが、そのなかで女といつてはあれ一人らしい」

「左様、女一人とすれば連れがあるだろう、兄貴とか、夫とか、なんとかかうものと一緒に来ていなければならぬはずだ」

「立派な保護者があるのだろう」

「保護者がなければ、第一ここまで来られもすまい、来てもらははすまい」

「左様、年若い女を一人、保護者無しに、こんなところへ手放す奴も無かろうじゃないか」

「それはそうに違いないが、どうも見たことのたしかにある娘だが、どわす度忘れをしてしまったよ、思い出せないよ」

「思い出すよじゃ思いが浅い——というわけでもあるまいが、

ちよつと愛くるしい娘だな」

「第一愛想がいいね、人をそらさないところがあるが、それといって、それ者のしゃするワザとさがない、天然に備わっているチャームというものがある」

丸山勇仙は、多少語学の素養があるから、それでチャームというような言葉をつかつてみるのでしよう。仏頂寺弥助にはわからない。わからないなりに反問もしない。

「どうもいかな、女はくろ、う、とに限るよ、いかにほれてみたところで素人しろうとでは、うっかり冗談もいえない。第一、今のが宿の娘であるとか、女中とかいうことであれば、お愛嬌に、お酌の一つもしてもらうことに遠慮もいらさないが、客であり、ことに保護者がついていたんでは、万事休すだ」

「左様さ、保護者のある女は仕方がない」

二人がしきりに保護者呼ばわりをして、何か残念がつているその噂うわさの主ぬしというのは、想像するまでもなく、ここに来ているお雪のことなんでしょう。

昨晚か、今晚か、二人が着いた時、多分お雪あたりが居合わせて、宇津木兵馬——二人も心得て兵馬とはいうまい、変名の静馬あたりを呼んだであろうが、相当に説明して案内を頼むと、わかりがよく、直ちにこの部屋につれて来て、ここまで落ちつくように世話を焼いてくれたのはお雪で、そのお雪の親切ぶりが、なんとなく二人を動かしたものですから、とりあえず、その噂を以て話頭が開かれたものと思われます。

そこへ兵馬が風呂から戻って来たものですから、兵馬は驚くよりも、苦にが々にがしい思いをしました。

二人は、戻って来た兵馬を見て、ニヤニヤと笑い、

「やあ、暫く暫く」

と言いました。

人の留守へ入つて来て、肉を煮たり、酒を飲んだりしている無遠慮。それをとがめ立てしていた日には、この連中とつき合いはできない。

苦々しい思いをしながらも、兵馬は詮方なしとあきらめて手拭をかけ、

「諸君、いつ来た」

「昨晩から今曉へかけて、戸の隙間すきまからそうつと忍び込んで来たわいな」

「あれから、君たちはどうした、あの女も一緒か」

「あれか——いやどうも面目めんぼくがない」

丸山勇仙が顔を一つ逆に撫でて、面目ない様子をしながら、

ケロリとしている。

「無事に、浅間まで送り届けてくれただろうな」

「それがさ……」

「では、一緒にここへでも連れて来たのか」

「それがさ……」

いやに彼等二人はニヤニヤして、齒切れのいい返事をしない。

兵馬は、机に近い程よきところに席を占めて、

「そうして、拙者がここへ来たことを、君たちは、知ってたずねて来ましたか、或いは偶然にここへやって来たのですか」

「雪に足あとがあるものだから、こいつ狐の足跡ではない、多分、君の足あとだろうと思うから、それを伝って、とうとうこれまで入りこんだというわけさ」

とはいえ、この辺こそ雪だが、松本あたりはまだ雪ではある

まい。

しかし、いずれにしてもこの二人の来合わせたのは、偶然ではなく、兵馬の足あとをかぎつけて来たものであることは、疑いが無いらしい。

とすれば、あの女はどうしたのだ。

中房からの道、兵馬のあとに追いつがつて来たあの女はどうしたのだ。もと浅間の芸妓げいしやであつたという女。

兵馬がもてあましたところを、二人が引受けたはいいが、兵馬は、手放してかえつて持扱とっている。

ここへ来たのも一つは、その行方ゆくえが気になつてたまらないからだ。

しかし、詰問してみると、二人はニヤニヤと笑うばかりだ。いつたい、この連中に正面から詰問してかかれれば、かえつて、

いよいよ事を扱いくいものにする。現在、連れて来てこの隣室へ置いたからとて、二人は江戸の八丁堀へ置いて来たようなことを言い、江戸の八丁堀へ届けて来ても、この隣室へ置いてあるようなことを言いたがるのが、厄介者の常だ。それを知っているから、兵馬は、手強く詰問しても駄目だと思っていると、案外先方が碎けて来て、

「宇津木君、実はねえ君、実はねえ、君に申しわけがないんだよ、我々両人、あんな口幅つたいことを言つて、あの女を引受けてからさ、なあに御心配はないさ、我々だつて、見込んで頼まれれば、猫と一緒に鯉節の番人もする——後生大事に、あの女を連れて浅間へ送りかえす手筈であつたが、あの女が、浅間へは帰りたくないようなことを言うから、それではお望み次第、京鎌倉でも、江戸大阪でも、どこへでもおともをしようじゃあ

りませんかと、安手やすでに出て、そうして、まあ取敢とりあえず木曾街道を塩尻まで無事に同行したと思ひ給え。塩尻へ入ると、さあ、すっかり大きくじり、あの女の姿を見失つてしまつたのだ、上かみへのぼつたか下しもへさがつたか、どこをどうしたか、女の行方ゆくえがかいもく知れなくなつた。血眼ちまなこになつて、大の男二人が騒ぎ廻るのが笑止千万、実はまかれたのだ、とうからきやつにすつかり鼻毛を読まれていたのだ。地団駄じだんだふんでも追つつかない、女と侮つた——あちらが役者が一枚上だ。そのまますすご引返してここへ来る器量の悪さ——実以て面目次第もござらぬ」

だが、この話だつて、どうだかわかつたものではない。果して、まかれて、器量悪く戻つて来たものか、或いは、散々さんざんもみくちやにして、突つ放して引上げたものか、保証の限りではないが、とにかく、あの女をここへ連れて来ていないことは

本当らしい。

まもなく二人は切上げて、これから湯に行くと言いました。

湯に行つたついでに、誰か留守番の者に、我々の部屋を周旋してもらおうと言ひ出したのは、いつまでも、兵馬と同室にいるつもりではないらしい。

果して二人が出て行くとももなく、留守番の男がやつて来て、御同宿のお方を、この突きあたりの二番目に致しましょうといつて、そのすべての持物を運びはじめました。

厄介払いをしたつもりで、兵馬は息をついたが、この厄介払いで、ここまで見込まれた以上は、これから以後のことが想像される。

この二人の亡者共に、つけ廻されてはたまらないから出し抜くに限る。出し抜いたからとて、影の形における如く、離れつ

こはないから、絶縁を宣告するのも無益である。しかるべき時刻を見て、無断にここを出立してしまふことだ。

その時刻は、いつがいいかな。永くここに逗留とまりゆうしている必要は更にならないのだから、明朝あたりがよかろう。それとも今晚、月夜でもあれば、彼等を出し抜いてしまつてやろう。そうして、ともかくもまた一旦松本へ帰るのだな。

いや、待て待て、せつかくここへ来た以上は、ここで知り得るだけのことは知つて置かねばならぬ。

ちよつと一夜めぐりをして、尺八の音に驚かされて帰るだけでは、どうも冥利みょうりが尽きるようだ。

とにかく、一応は、何人の人たちがこの宿にいて、それのおのおの住所、氏名、族籍というようなものまで、一通りは当りをつけて帰らぬことには、偶然にしても、偶然を利用するこ

とが足りない。

よし、かりに宿帳を見せてもらおう。

それに、随時、あの炉辺閑話が開かれるらしいから、あれに列席してみると、席の空気もわかるし、滞在客の性質もわかるのだ。それらについて、知り得るだけは知って置いても害になることではない——兵馬はそう思案したものだから、今日はひとつ、これから炉辺閑談の席へ、進んで出席してみようとして、一通り衣裳をつけました。

そうして、袴はかまをつけるまではないが、刀と脇差は、持って行くか、行くまいかと思案し、それも物々しいし、丸腰も本意でないようだから、脇差だけを差して行くこうと、その通りにして、二階から徐々しずしずと炉辺をさして下りて行きます。

この時、炉辺閑談の席は、鐙小屋あぶみごやの神主の退却した時を以て

一次会が終り、あとは閑散のやからが残席を守り、或いは長々と炉辺に寝そべって、ほおづえ頬杖をつきながらだまり込んでいるものもある。

つまり、池田良斎一行の北原と、それから留守番のおやじと、村田寛一と三人だけでしたが、三人とも、いずれも、だまりこくって、炉辺を囲んでいるところへ兵馬がやって来ました。

「さいぜんは、神主さんが見えたとやらで、お招きを受けましたが、少し用事があつたものですから失礼しました」

「いや、どうも。まあ、おあたり下さい」

横に寝ていた者までが起き直つて、おやじはそれに薪を加えました。見れば、大きな鍋で芋粥いもがゆをこしらえているらしい。

「御免下さい、御同宿の方々はお賑にぎわしいようですが、みんなで何人ほどおいでなさいますか」

兵馬にたずねられると、村田が、

「全く珍しいことですよ、この温泉へ、こうまで顔がそろつて冬籠りふゆごもをしようなんぞは、白骨はじまつて無いことでしょう。売れ出すと売れるもので、もうこれきりと思つていた後から後から、俳諧師の梅月君が来る、獵師の嘉蔵殿が来る、雪を踏み分けて貴殿というものが来られたかと思うと、そのあとを追つて、ただいま湯に行かれたあの二人の御仁……」

村田は、齒切れのよい言葉で言いました。

十二

「あなた方の御同勢は、すべて何人でございますか」  
兵馬から物おだやかにたずねられて村田が、

「われわれの同勢は左様——すべて五人になりますかな」

「みんな男の方ばかりですか」

「無論です、野郎ばかり五人揃って、越年おつねんをしようというんです」

「女の方もおいでのようですが、あれは、あなた方のお連れで  
はございませんか」

「あれは、違います、全く他人です」

「ははあ、そうしますと、あなた方御同勢の五人と、その女の  
方の一行と、二組だけでございますか」

「それに俳諧師の方が一人おります、留守番と、獵師が二三名  
出たり入ったり……」

「そうですか。そうして、あなた方は失礼ながら、どちらから  
おいでになりましたか」

「飛驒ひだの方から参りました」

「重ねて失礼ですが、御商売は何ですか」

「商売……」

村田は、ちよつとばかり苦にがい顔をして、頭へ手をやり、

「商売と改まつて聞かれると閉口するですがね、実は神楽師かぐらしな  
んですよ」

「神楽師？」

「ええ、池田というあれが頭分かしらぶんで、神楽をやりながら諸国を渡り  
歩き、この冬はここへ籠こもつて、また飛驒の方面へ帰ろうと思ひ  
ます。一行のうちには、飛驒の高山生れの者もありますんでな」  
「そうですか、それでおのおのは、音曲のたしなみがおありな  
さるのだな」

「神楽師かぐらしとは言いながら、変り種ばかり集まっていますから、神

楽師にしては人間が大風おおふうだと思召おぼしめすかも知れませんが、事実、楽は道楽のようなもので、学問武術などにも相当に心がける奴がいるんですから、変に思召すかも知れませんが、慣れるとみんな無作法者ばかりです」

「それも頼もしいことです。実はただいま、神楽師とおつしやるから、こいつ怪しいと思いましたよ。普通神楽師といえは、われわれの頭にまずうつってくるのは、二十五座とか、十二神楽とか、馬鹿ばか囃ばやし子とかいったようなものですが、あなた方は、そんな種類の人とは思われないから、世を忍ぶ謀叛むほんぎ気の方々かと、一時は疑いの心を起しました」

「いや、決してそういう物騒なものではありません。一口に神楽といえは、馬鹿囃子みたようなものにとられ易やすいですけど、文字そのものを吟味してごらんさい、神を楽しむ、或いは神

を樂しませ申すという立派な字面じづらです、従つて、神樂師といえ  
ば、神前に奉仕する敬虔けいけんな職務ということにならねばならない  
のですが、どうもそう響かなくなっているのは習慣ですね。た  
とえば、道楽者といつたようなもので、道楽という字面からい  
えば、道を楽しむのですから、孔孟や老莊の亜流でなければな  
らないのに、普通、道楽者といつてしまえば、箸にも、棒にも、  
かからないやくざ者とみなされちまいますからね。文字の威力  
よりも、習慣の惰性だせいが怖ろしいということになります」

村田が、一応こんな弁解を試みたことだけでも、すでに普通  
の神樂師でないことがわかり、或いは神樂師を標榜ひょうぼうして、世を  
忍ぶや、からではないか、そうだとすれば、時節柄、意外の人材  
が隠れていないものでもない、つきあい様によつては、話しよ  
うによつては、存外の得るところがあるかも知れぬ、とにかく、

この一行は、いずれはただ者ではないように、この時、兵馬が考えてしまいました。

「そうでしょうとも、神前に奉仕する意味の神樂と、徒らいたずに俗情に媚こぶるみせものの類たぐいとは、質を異にせねばなりません。それはそれとしまして、あなた方の御一行のほかの客人は、皆、御存知よりのお方でございますか」

「われわれのほかの一組は——あの婦人の加わっている一行ですな、あれは都合四人とか聞きました、ここへ来て初めての知合いです」

話半ばのところへ、久助が入って来ました。

久助は、お雪一行と上野原から来たものですから、本来ならば、あの時分、兵馬を見知っていなければならぬのですが、ちょうど、面会の機会がありませんでしたから、この場へ入っ

て来てても、おたがいに他人で、久助がまずて、いねい、に一座にあ  
いさつをし、他の者がそれに会えしやく積をしたというようなあんばい  
で話が進むと、村田が、

「久助さん、お雪ちゃんはこのごろ、ちつともここへ出て来ま  
せんな」

と言いました。

「はい、何かと忙しそうにしていますから」  
と久助が答える。

お雪ちゃんという名前だけでも、兵馬に思い出があるといえ  
ばあるのですが、お雪ちゃんという名前は、月見寺に限ったわ  
けのものではなし、ここで兵馬が、特にその名にひっかかる理  
由ありません。

程経て兵馬が久助に向い、

「あなたは、どちらからおいでですか」

とたずねました。それはこの男こそ、例の五人の神楽師の一行のほかだと見たからのことでしょう。そこで久助は、

「わしどもは、甲州の郡内ぐんないの方から参りました」

「甲州の郡内……」

「はい」

「郡内はどこですか」

「ええ、谷村やむらでございます」

「そうですか」

ここで久助が、郡内は上野原でございます、上野原の月見寺でございます——といわないで、谷村と言ったのが幸いでした。最初から多少の用心をして、わざと上野原や、月見寺を、表に出さないことに申し合わせていたのですが、久助の本来の生れ

所が、その谷村なんですから、不自然はありません。

「旦那様は、どちらからおいでになりました」

今度は久助から、極めて自然に、またていねいに、兵馬の来きたるところを儀礼的にたずねてみたものです。

「拙者は、もとは江戸ですが、諸国を歩いて、昨日松本から、これへやって来ました」

「左様でございますか」

久助は、こくめに頭を下げると、村田が引取つて、

「時に、あなた様は武者修行ですか」

と兵馬に、これもはじめて反問を試むると、兵馬も心得て、

「まあ、武者修行と申せば、武者修行のようなものでございましょう、未熟ながら、剣術稽古を兼ねての諸国の旅です」

剣術修行を兼ねて仇討あだうちの旅でございませぬ、とも言えないから、

素直にこう言うと、村田が、

「ははあ、それはお若いに御殊勝のことでございますな。劍術は河流を御修行でございますか」

「直心じきしん陰かげを少しばかり習いました、それと、槍を少々教わった覚えがあるばかりですが、武術は本来、好きには好きです」

「好きこそ物の上手なれで、さだめて鍛錬のこととお察し申しますが、柔術の方はいかがでございます、柔術は……」

「あれはまだ、一指を染める暇がないというわけでございます、習いたいには山々ですが、一方でさえ物にするには、なかなかの苦心と、時間とを要します」

「御尤ごもつともです——では、さだめて居合いあいの方は……」

「それも物になっておりませんが、諸流をホンの少しずつ、手ほどきを見せていただきました」

「御謙遜のお言葉でお察し申しますと、失礼ながらあなたは、なかなかお出来になりますね」

と村田が言いました。兵馬は、最初からこの村田を異いなりとしていたところですから、かえって、

「いや、あなたこそ、拙者共に対する御質問がいちいち要所に当って、先輩に試験を受けているような気がしないでもござりませぬ、いろいろとお話が承りたいものでございます」

そこで、村田と兵馬との間に、武術の話がはずみました。

話はずむにつれて村田が、大極流の兵法のことを、兵馬に向って聞かせたのが耳新しくあります。

大極流の兵法には、棒も、剣も、槍も、拳法も、捕とりなわ縄も、忍び

の術までが、みな一つ体系に摂取されてあるということと、支那の武術との関聯を、兵馬は耳新しく聞いていると、村田が、

「今日やつて来たあのあぶみしや鐙小屋の神主というのが、あれが、若い時分には世間を渡った男と見えて、よくいろいろのことを知っていますよ、諸国の兵法、武術の伝統などについて、時々要領を得た話し方をするのみならず、往々玄妙に触れるようなことを言いますよ。当人が、諸流にわたって究めているわけでもなからうが、あんなような人間は、どうかすると、非常に間違つたことをいうと共に、非常に当ることを言い出すものです。一度、御逗留中にあの鐙小屋へ行つて、おやじをたたいてごろうじろ」

そこで兵馬が、

「ああ、あの神主殿ならば、さきほど、風呂場の中で面会し、隔てのない話しぶりに接しました」

「そうでしたか、ちよつと変つたところがありました。あれ

で、この寒天に、乗鞍ヶ岳へ上つて、朝の御来光を拝んで帰るのですから。行者ではありません、やはり神主ですよ」

「いかにも、陽気そのもののような顔色をしておりました、そばへ寄ると、何か暖かいように感じました」

「一切、光明主義でしてね、陰気が大嫌い、陽気が、一切を救うというような教義をよく聞かされますが、一面の真理はあつて、またその真理を幾分かは体現もしているようです。とにかく、変つたおやじです……そうそう、久助さん」

村田は急に思い出したように、話半ばで久助を呼んで、

「久助さん、大事なおことづけを忘れましたよ、あの鎧小屋の神主様がね、お雪ちゃんにおことづけなんだ、どうも、あの子の半面には陽気がうせて、そのいわゆる『けがれ』というものが出来たから、気をつけなくちゃいけない、前にもあること

だから、心配だよ——神主さんが、お雪ちゃんの見えないのを、あぶないことのように言っていたから、お雪ちゃんに、よくそう言つて下さい」

「はい承知しました」

「全く、お雪ちゃん、このごろ、めつきり暗くなつたようだね、ちつとも人中ひとなかへ面かおを見せないじゃないか」

「いいえ、あれでなかなかお忙せわしいのですから、手が放されねえんでしよう」

「とにかく、飛驒ひだの高山のイヤなおばさんとやらのこともあるだろう、浅吉君という色男のこともあるだろう、それらの運命を、大抵あの神主さんが予言しているじゃないか。今度の予言が、お雪ちゃんの上にも当てはまるうものなら大変だぜ。神主さんの言い草じゃないが、陽気に、ぽんぽんと話しに来るよ

うにならなけりや、第一、われわれの気まで腐るさ」

「そう言ってみましょう」

久助が、叱られてもしたように恐れ入る風情を、兵馬が見て、  
「あのお嬢さんは、あなたのお連れなのですか」

「ええ、左様でございます、私の近所の人でございます」

兵馬がこれを認めてしまつていと合点がてんしたものですから、  
ぜひなく久助が答えると、兵馬はつづいて、

「あなた方のほうの組は、お二人ですか」

「ええ、いいえ、まだほかに連れがございませんですが、病氣  
でございますから」

「ははあ、では、あなた方は、ほんとうの湯治に来ていらつしやる  
のですかね。あの方は、あなたのお娘さんではないのですか」  
「私の娘ではございません、いわば主人といった筋でございます」

す」

「そうですか、お部屋はどちらですか」

「あの三階の東に向いた、角でございます」

そこへ珍しくも、一方の廊下の入口から、お雪が姿を見せて、

「久助さん、お火種を少し下さいな」

「あ、お雪さんですか」

一同の者が、お雪の声を、不意に珍客でもおとずれたもののように聞いて、言い合わせたように、こちらを見ましたけれど、お雪の姿は柱に隠れて、縦にその半身だけしか見えません。

しかも、その半身といえども、薄暗がりのところに白く漂っているものですから、はつきりとは認めることができなないのです。

「どうしたのですか、今日は、どのお部屋も、どのお部屋も、み

んなお火が消えてしまいます。わたくしどもの座敷も、それから、昨日おいでになつた二人のおさむらいさんも、火が冷たい、火が冷たい、とおっしゃりながら、お酒を召上つていらつしやるし、それから、若いおさむらいのお方のお部屋も、とんと立消えがしているようでございますから、ついでおきましよう」といつて、お雪は、ひのし型の十能じゅうのうを差出しました。

「そうですか、では、あとから私が持つて行つて上げましよう。お雪さん、まあ、こちらへ入つて皆さんとお話しなさいまし」

久助は招いたけれども、お雪が心安く入つて参りませんものですから、自分が立つて来て、お雪の手から十能を受取つて、炉辺へ戻り、火の塊を物色したが、どうも思わしく盛んな塊が無いと見えて、新たに木炭を炉の中へ加え、

「これが、かんかんとおこつてからに致しましよ、焚落しで

は、どうも火持ちが悪うござんすからな」

その時に、会話を中止して、こちらを見ていた村田が、

「お雪さん、あなた、このごろどうかなさいましたか、ちつとも姿を見せないじゃありませんか」

「いいえ、どうも致しません」

「今、皆さんで、あなた方の噂うわさをしていたところですよ、ちと、お話しなさいませぬ」

「有難うございます」

「あまり遠慮をなさつてはいけません」

「遠慮なんて、しやしませんけれど」

「では、少しお話しなさい」

それでも、お雪は入ろうとしないで、例の薄暗いところに立ち姿の半身で、あるが如く、なきが如くに、しおらしいもので

あります。

ここでは、すすめられても遠慮をしているくせに、一方では、頼まれないのに、部屋部屋の火の心配までして、ほとんど女中代りの世話まで好んでして歩くものらしい。

宇津木兵馬も、その時、そう思いました。自分の部屋も、自分が立つまでには、そんなでもなかつたが、そのあとで、この娘さんがしらべてみた時分には、炬燵こたつの火が消えてしまつていたのかしら。そこまで気を利きかせてくれているこの娘さんの、相変らず行届いた親切ぶりが、宿の人でないだけに、感謝の至りと思わずにはおられません。

しかし、この際、こうして入りもせず、去りもしないお雪の遠慮が、一座の気合を殺そぐことはかなり夥おびただしいものですが、村田がそのバツを合わせるように、兵馬に向つて話をつづけて言

いました、

「あなたのお連れだといつて、あとからおいでになった方も、やはり、武術修行の仁とお見受け申します」

「いかにもお察しの通り、一人は仏頂寺弥助でございます」  
「なるほど」

村田がうなずきました。うなずいたところを見ると、村田も以前から、仏頂寺の名を聞き知っていたのかしら。或いは時の調子で、お座なりにバツを合わせたのかしら。そこで兵馬も漫然と、

「あとで御紹介いたしましょう」  
と付け加えました。

「仏頂寺弥助という御仁は知りませんが、仏生寺弥助殿なら承っております」

と村田がいう。

「同名異人であるかも知れませんが」

「しかし、その仏生寺弥助殿ならば、先年、京都で殺されてい  
るはずですよ」

「そうでしたか」

「斎藤篤信斎の甥おいに当りますかね」

「ははあ」

「そもそも斎藤弥九郎先生が、越中国氷見郡仏生寺村というの  
に生れたのですから、その村名を取っていただけ弥助殿、こと  
に弥九郎の弥、弥助の弥、通かよっているようですよ。ですから、甥でない  
までも、親戚かなにかであるには相違なからうと思えます」

村田寛一がこう言ったものですから、兵馬も考え出して、

「そこまでは究きわめてみませんでした。が、斎藤先生の門下であり、

流儀が神道無念流であることは、争われません」

「稽古はどうですか、業わざは」

「それは確かなものです、練兵館の仕込みですから、隙間すきまはありません」

「して、人間はどうです、人物は……」

「さあ……」

と兵馬が腕を組みました。

正直のところ人物は感心しない。感心しないけれども、兵馬として、それを露骨に言ってしまうたくないような気がする。

かりにも、同行の友人のアラを言うことが忍びないような気がする。そうかといって、人格清明、志気高邁しきこうまいと、そらぞらしい

おてんたらを並べるわけにもゆかない。それを村田が引受けて、「あまりよくないでしょう」

「そういえばそうです、惜しいものですね、あれだけの腕を持ちながら」

「仏頂寺弥助と仏生寺弥助とが、どれほど違うか知りませんが、その仏生寺殿の方は練兵館の方から勇士組として選抜されて、長州へやられた時分に、京都でよからぬ行いがあつたというところで、同志の者から、殺されたということを知っております」

「ははあ、それほどの手練を、誰が、どうして殺しましたかしら」

「京都で悪事をやった勇士組のうちの三人は、この仏生寺弥助と、高部弥三雄というのと、三戸谷一馬というのと二人でした。

本来、この勇士組というのが、毛利の若殿の頼みを受けて、齋藤篤信齋が、自分の手から壮士を集めて送つたもので、いづれも錚々たる腕利きであり、下関砲撃の時などは大いに働いたも

のですが、以上の三人が悪い事をして、体面上容赦がならぬというところから、同志の者で斬って捨てようとしたが、相手が尋常でないから用心して、ことに仏生寺弥助は、遊女屋へ誘つて行つて、酒を飲まして、だまして縛つたということ聞きました。それを高部と、三戸谷が知つて、鴨川原へ逃げ出したところを、北村北辰斎が追いかけて、川原で斬合つたが、なにしろ相手が相手ですから、北辰斎も不覚を取つて、小手を斬られて太刀を取落したが、それでも片手で脇差を抜いて受留め受留めして、すでに危ういところへ、篤信斎先生の一子新太郎殿がかけつけて、二人をしとめたということでした」

「ははあ、それは初めて承りました」

「普通の浪士の斬合いと違って、有名な剣術者の真剣勝負でしたから、これは後学のために見ておきたいと、かけつけた時は、

もうすでに事が済んでいたので残念でした」

「そうでしたか。して、高部と三戸谷の両人はその場で斬られ、酒に酔わされて縛られた仏生寺弥助殿はどうになりました」

「三人ともに討首うちくびになったということは聞きました、その後  
のことは聞きません、まさかここに来ていた仏頂寺殿が、その  
仏生寺殿の生れかわりであろうとも思われませんが……」

「なるほど」

兵馬が、またも考え込んだ時、

「さあ、火がおこりました」

久助が火をハサんだので、お雪がまだ以前のところに立っているのを知りました。

お雪ちゃんのこのごろの仕事は、社会奉仕といえれば一つの社会奉仕でしょう。

ほかに女手の一つもない大きな宿屋の中のことですから、男で気のつかないことは、何でも自分の手でしてやらねばならぬという責任でもあるかのように、何かと気を配らずにはおられません。

そこで、自分の炬燵こたつに火のない時は、他の部屋のそれと同じように心配して、冬籠りふゆごもの空気を、いくらかでも暖かいものにしてやりたいというような心づくしは、持って生れたこの人の親切気ですから、どうすることもできません。

今も、十能の中に、かんかんとおこった炭火をたくさんに盛つて、それを後生大事ごしようだいじに抱えながら、二階の梯子はしごを上りにかかり

ました。そうして二階のいちばん手近いところの部屋、つまり宇津木兵馬の座敷のところへ来て、ちよつとしなをして、様子を見た上で、誰もいないと知りつつ中へ入って行きました。

今では、誰もいないどの座敷へも、相当の遠慮無しに出入りすることが、自分の特権のようにもなっていると思います。つまり、知らず識<sup>し</sup>らず、この宿屋全体の主婦であるという実際と、気位を、いつのまにか、事情がお雪に与えてしまったようなものです。

兵馬の留守の間に、お雪はよく炭を生け替えて、新しい炭火をさしこみ、灰をならしておいて、それから余った炭を、火のしの上の炭火に加えて、そうして、暫く、うつとりとわが物のように、その炬燵に手を差しこんで考え込んでいました。

そうすると、この室はいとど閑寂<sup>かんじやく</sup>ですが、一三間を隔てた、あ

との二人連れのみむらいの部屋では、カラカラと高笑いがあったり、話に興が乗つたり、罵ののしつたり、噪さわいだり、あざけつたり、議論を闘わせたりするようなのが、ひとときわ耳に立ちました。至極元気のよい人たちだが、そのわりに騒々しくないのであるところが、がらかと思いました。

しかし、聞いていると気のせいか、二人ばかりであるべきはずの、また事実二人ばかりであるところの、二人の元気な会話の間へ、ちよいちよい女の声が入ります。

何と言っているのかわからないが、二人が無遠慮に高話をしている間へ、女が何か言つて、ちよいちよい口をはさんでは、甘えてみたり、お酌しやくでもしてみたり、そうかといえは、軽くからかわれて笑つたり、手きびしいいたずらをされて、きやつきやつというて振りもぎつていような空気と、調子が、お雪の耳に

ついてなりません。

最初のうちは、無論、それを自分の僻耳ひがみみとばかり、問題にはしませんでしたが、あんまり長く続くものですから、お雪もようやく気になり出してきました。

あの二人が酒を飲み合つて、高話をしている中に、たしかに女の人が一人、とり持ちをしているに相違ない——どうしても、そうとしか受取れない空気の動揺を、お雪が感得せずにはおられませんでした。

もしやあの人たちは、女子衆おなごしゆをお連れになつて来ているのではないか、ときえ疑われたものですから、お雪は、炬燵こたつの中へ手を入れたままで、我を忘れて、その音を聞取ろうとしました。

つまり、あのお二人の中に女が立交つているとすれば、それはいかなる女であるか。また、はつきりとは聞取れないが、何

かしきりに二人の間へ調子を合わせているあの言葉、あれは何と言っているのだから、それを明らかに聞取りたいものだと、お雪は息をひそめて、耳をすましました。が、どうも、たよりのないことには、空気と、調子はそれだが、音そのものが何を言っているのだから、その単語の一つさえ、はつきりと聞取れないのが、もどかしくてたまりません。

そこで、自分の耳のうちに起る幻覚として、それを打消しながら聞いていると、まさに男性二人だけの言葉で、それは、単語もはつきりと聞取れるが、暫くすると、また混線して、その間へ、何とも聞取れない女声じよせいの呂律ろれつが入り来るきたのを如何いかんともすることができません。

お雪は、そのことで幻覚に陥っているうちに、つい、いい心持になりました。

いい心持になつて、炬燵にいるうちに、なんとなく泣きたい  
気持になりました。

ここで思う存分泣いてみたいような氣になると、隣室  
の幻覺のことも耳には入らず、他人の座敷を、わが物顔に、帰  
ることを忘れているのも氣がつかず、なんとなしに、思う存分、  
甘い涙にひたつて、泣けるだけ泣いてみたいような氣分で、炬  
燵に頬をうずめてしまいました。

ですから、隣室の幻覺は、もうその時分に消え失せて、二人の  
高話も、ふつとやみ、その中に妙にからまつた女の音もきれいに  
消えてしまい、今までの喧けんそう噪が、あるかなきかの世界に變つ  
てしまったことも、とんと氣がつかずに、夢のようになっている  
と、不意に背後に、衣きぬず摺れの音がしたかと思うと、早くも、自分  
の両の眼を、後ろから目かくしをしてしまったものがあります。

「あれ、まあ、どなたですか」

お雪は全く驚き呆れてあきしまいました。

今までこの宿中で、かなり誰にも親しくしていたが、その親しみというものは、おのずから限界というものがあつて、未だいまかつて、こうまで無作法になれ親しまれたものはないはずです。

後ろから不意に目かくしをして、当人の相当に驚き呆れるのを見すました上で、当ててごらんとかなんとかいったり、いわなかつたりして後、パーツと蓋ふたをあけて納まりをつける新しくもない悪戯いたずら。子供の時分なら知らぬこと、無邪気にしても、あんまり人をばかにしている。むしろ乱暴でもあり、無礼でもある。お雪の驚き呆れて狼狽ろうばいするのみならず、その狼狽に、憤慨の勢いを加えたのもぜひがないことです。

「ごじょうだんをなすつてはいけません」

目をおさえられながら、それはむしろ叱責するような声でありましたが、後ろの人はなんにも言わず、まして手を緩めようともしません。多分、面には舌を吐いて、ニヤニヤ笑っていることでしょう。

「お放し下さい」

お雪は烈しく首を振りましたけれど、その押えている手というのが、やさしいいたずらでやみそうなやさしい手ではなく、革のように硬い、大きな掌で、そのくせ、死人のように冷たい手でありました。

「ほんとに、どなたですか、ごじょうだんをあそばしてはいけません、どうぞお放し下さい」

お雪には、その押えられた手の主が誰であるか、見当がつかないらしい。

ここには多くの男性がいる。否、自分一人を除いては、すべては男性であつて、そのうちにはかなり異種類の人が雑居しているのだから、そのうちの誰の手と見当のつけようのないのもぜひがないでしょう。

しかしながら、池田良斎の一行の人たちの中には、かりにもこんな無作法な人はひとりも無い。留守番や、猟師たちの人は、質朴な山氣質やまかたぎの人たちで、自分たちに一目も二目もおいて、敬意を表していようと、こんな無作法を働く人はひとりもない。当惑の限りを尽したお雪は、大きな声で叫びを立てて、救いを求めようかときえ思いました。

しかし当座のいたずらでするものを、そうまでするも、たしなみがなさ過ぎるように思つて我慢をし、

「どうぞお放し下さい」

「は、は、は、は」

と、はじめて高笑いしたが、手はまだ放そうとしないから、

「お放し下さらなければ、人を呼んで助けていただきませよ」

「は、は、は、は、誰だかわかりますか」

その声は太い声でしたが、それでもまだ思いあてることができ  
ない。

「わかりません——どうぞ、お放し下さいまし、ね」

「は、は、は、は、驚きましたか」

ここに至つて手を放して、突き出した面かおを見ると、それは問  
題の仏頂寺弥助でありました。

お雪は、仏頂寺の面を見てゾツとしました。

もう少しおきゃんな子であつたら、いきなり仏頂寺の面つらをハ

り飛ばしたかも知れません。寛容なお雪にしては珍しいほど、憎悪の念が、この時にこみ上げて来ましたが、その次には、ほとんど座にたまらぬほど、恐怖の念さえ加わってきましたものですから、

「どうも失礼しました、御免下さいまし」

と自分がわびて、火のしを持って立とうとするのを、仏頂寺が、

「まあ、よいではないか、取って食おうとも言やしませんよ」

それでもお雪は、取って食われるより怖ろしくなったが、幸いなことに、その時、廊下で足音がしたのは多分、この部屋のあるじ、宇津木兵馬が立戻って来たのでしよう——そのすきを見てお雪は、むしゃくしゃにこの座敷を飛び出してしまいました。

仏頂寺弥助は、その時、もうすっかり旅の仕度したくをしておりました。

お雪が逃げ出したあとへ、入違いに入つて来た宇津木兵馬を見て、

「宇津木、さあ出立しよう」

「おや、もう帰るのか」

「こんなところに、いつまで愚図愚図していても仕方があるまい、立つときまったら早い方がいい」

「それでも、あんまりあわただしい」

「そのうちに大雪でもあると、おつくうだからな、一時いっときでも早い方がよろしい」

「うむ、それにしても明朝でよかろうではないか、今晚一夜を明かして、明朝早立ちとしたらどんなものか、拙者の方にも、これでまだ相当に仕度というものがある」

「われわれは、その今晚一夜がいやなのだ、今のうちに立つて

しまいたい」

「何をそんなに、急にいやけがさしたのか」

「ここに逗留とつりゆうの奴等が、どうも気に食わない、イヤな眼附でわれわれを見る、さもわれわれの素性すじょうを知り抜いているような目つきで、われわれを見るのが癩しやくだ」

「えらく、小さなことを気にしだしたな」

「それともう一つ、夜中になると聞え出す、あの尺八が癩かんにさわつてたまらない」

「ははあ、貴殿たちに似合わない、人の眼附を気にしだしたり、尺八の音を耳ざわりにしたり、まるで神経衰弱の気味だ」

「空気が違うから気に食わんだ、イヤに一癖ありそうな冬籠ふゆごもりの奴等ではある、妙に身を落してはいるが、イヤに学者面がくしやめんが鼻の先にブラ下がって、われわれを見下げるような面附つらつきが気に

食わん」

「それは君たちのひがみだろう、そう悪い人たちばかりではない」

「それに、今晚、またあの尺八を聞かされては眠れるものでない、なんだか冥府みょうふへでも引きこまれるように、妙に気が滅入めいつてたまらなかつた、今晚、またあれを聞かされては本当にたまらないから、逃げ出すのだ」

「しかし、拙者の方は、そう一夜を争うほどの差しさわりは何もないのだから、明日出立のこととしましう、諸君、たつて出立なさるなら、遠慮なく一足お先へ」  
と兵馬が言いました。

「では、丸山もその気でいるから、一足お先へごめん蒙こうむるとしよう……そうしても君も一旦、松本へ出るだろうな。松本へ出

たら、浅間へ来給え、ともかく、あれで待合わすと致そう」

「拙者の方は、しかとお約束はできない」

「浅間でいけなければ、甲州の有野村へ来給え、あそこで君を待っている人がある、有野村の藤原家の娘が、君を待ちわびているはずだ、よろしく」

「それもお約束はできない、御縁があらば、そのうち、いずれかで逢いましょう」

「時に宇津木君、君は路用を持っているか、用意があればさしつかえないが、もし手元不如意だったら、遠慮なく言ってくれ給え」

これは不思議である。

兵馬の方へ無心の出そうな面が、かえって、先方から勝手元を志願して出る。

十四

宇津木兵馬は、二人を先へ立たせてしまう方がかえって安心だと思いました。

彼等が今日立ってしまったあと、自分は、ひとり悠々ゆうゆうと志す方へ旅立ったほうがよろしい。

ただ一つ心配なのは、今夜のうちにも例の大雪でもあつて、道が塞ふさがった日にはことだが、まだそうたいしたことはあるまい。

昔、佐々成政さつさなりまさは雪中を、さらさら越えをして東海道へ出たという例もある。

ところが様子を見てみると、一刻も早く、一時も早く、い

らだつように見えた仏頂寺と、丸山が、容易に立つ気色はなく、  
またも御輿みこしを据えて、鶏肉の残りかなにかで飲直しの体ていですか  
ら、さあ、またぶり返した、あの亡者連ときた日には、ほとん  
ど捉まえどころがない、この分では後から立つといった自分の  
方が、先発をするようなことになろうかも知れぬ。

どちらでもかまわぬ。自分としては、彼等に付きまとわれず、  
一人旅さえできれば結句むすびそれで満足だが、あとに残された彼等  
と、それから従来の冬籠ふゆじもりの連中との間の、意志と、感情との  
疎通そつうぶりを考えてみると、どうも安んぜられないものがある。  
従来の客に対して、どうも気に食わない、気に食わないと、仏  
頂寺らが口癖のように言っている。尺八の音までも目の敵かたきにし  
ている様子だ。

この分で、双方が、相当の期間居残る間には、感情の行違い

が嵩こさじて、風、楼に満つるといつたような形勢にならねばよい、  
どうも、そうなるにきまつてゐるらしい。

仏頂寺、丸山は名うての者、逗留とまりゆうの冬籠りの連中も、それよりは異なつた意味において、一癖も、二癖もありそうだから、無事では済むまい。兵馬は当然の順序として、その事を気にしな  
いわけにはゆきませぬ。

しかし、それも、自分というものがおれば、いくらかその間に緩和剤ともなり得るが、自分が去つてしまえば、安全弁を抜きつぱなしで行くようなものだから、心もとない限りだ。

どちらに廻つても厄介者だ——と兵馬は、苦にがりきつて考え込んだが、その際、もういつそう気になるのは、この楼の中で、ただ一人のあの娘の身の上だ。

まだ、よく打解けては話さないが親切な娘、どこやらに人を

引きつける女性味のある娘。

仏頂寺のやからがあれをめぐけて、からかいはじめでもしよ  
うものなら、思いやられるばかりだ。

どちらにしても、あの娘にだけは、仏頂寺、丸山の身边へ、あ  
まり近寄らないように注意をしておいた方がよい、よしよし、  
二階の東の角の座敷にいると聞いたから、出立の前にはひとつ、  
訪ねて、それとなしの警告を試みておこう。

そうしてみると、やっぱり、迷惑でも、自分があの二人を引  
きつれてこの温泉を出て行ってしまった方が、宿の者全体に禍わざわ  
いの種を残さぬようになるから、いつそ、そうしてしまおうか。  
まことに迷惑だ、あの二人の亡者を引張って歩くことは、迷惑  
千万な儀ではあるが、その迷惑を人に残さず、自分が背負って  
歩く方が、迷惑が徹底している。

仕方がない——一緒に出かけよう、兵馬はこんなふうにも決心を改め、いずれ万事は明日という心構えです。

その覚悟で兵馬は、白骨の温泉も今日限り、明日は、また行方定めぬ旅に出るのだ、名残りに、心ゆくばかり、お湯にでもつかっておこうと、その日の夕方、湯ぶねの全く空いている頃を見計らい、ただ一人を湯の中に没入して、かなり長い時間、湯の音も一つ立てないでいると、多分、それと知らずに、戸をあけて湯ぶねへ近づくような人の気配がありましたから、そのつもりでいると、気配はあつたが、人が見えません。

その瞬間に兵馬は、隔ての羽目の隙間すきまから、自分をのぞいている者があるなと感じました。自分のいることに遠慮したのか、しないのか、とにかく、ここへ来かけて、ふっと立ちどまつて、隙見をしている人のあることは事実です。

兵馬の方ではすき見をしている者の、誰だかわからないが、こちらから見ればそれはお雪です。

お雪は、いつもの通り、誰もがたいてい入らない時分を見計らって、今日も、湯ぶねへ来たのですが、来てみると、やはり推想通りに何の物音もしませんから、遠慮なく帯を解いて、あわや、湯ぶねへ走り込もうとして、はじめて人の気配に打たれました。

誰もいないと信じきっている湯ぶねに人がいた——でもよかつた、このまま走り込まないで。そこで一枚になった浴衣ゆかたをたくし上げて、見るともなしの隙見で、羽目の隙間から中を見ると、兵馬の姿を明らかに認めることができました。

この時は、兵馬を兵馬として明らかに認めただから、驚きました。

到着の最初から、今まで、言葉も交わしたし、形も見ていたし、看病の親切までしてやっているはずなのに、おたがいにまだそれと気がつかずにいたのを、ここではじめて、お雪の方から兵馬というものを、兵馬としての全体を、不意に受取ったのだから、驚くのも無理はありません。

ある日の夕方、疲れ果てて、自分の月見寺の井戸のそばへ来て、一杯の水を求めた可憐かれんな旅の人が、その人でした。

そうして、同情のあまりにその夜、さを寺に泊めたために、計らず自分たちが危難を救われる縁となったのは、その人ではな  
いか。

何かを求めて、旅にさすらいの人とは言いながら、ここであの人に——お雪は飛び立つほどに、その奇遇をなつかしく思い  
ましたけれど、兵馬の方ではいつこう気がつかないで、まだ隙

見の人は隙見をやめないなど、軽く気に留めているばかりです。

目のあやまちではないかと、お雪ははやる心を鎮めて、とつくりと兵馬を見定めようと思いました。よく落ちついて、見れば見るほどその人ですから、今は間違いないと思いきって言葉をかけて名乗りをしようと思いました。何かおさえる力があつて、それを躊躇させたのが不思議です。

いけない、いけない、先方が気がつかないのだから、こつちから名乗りかける必要も、義務もないではないか、という声がお雪の耳もとでささやいて、何かしら、手をかけて後ろへ引戻そうとする本能があります。

お雪はそこで引戻されました。ゆかたの上へ丹前を羽織つて、せっかく、飛び込もうとした湯槽ゆおねに心を残して、音のしないように、気取られないように、この場を立ち出でてしまいました。

全く、その気配が消えた時に、兵馬が変な人があればあるものだ、共同の風呂だから、誰に遠慮もあるまいに、自分がここにいることを認めた上で、こつそりと立去ってしまった者があ  
る、自分がそれほど怖ろしげに見える相手か知ら、自分の方でこそ気の置ける人もあろうに、先客が新来の人に遠慮をする由よしもなからうに。

さりとは、妙にハニかんだ人だと、兵馬が笑止しょうしに思いました。

しかし、笑止に思ったのも束つかの間ま、ああそうだ、それに違いない、いま、来たのは、あれはあの娘さんだ、この宿の冬籠りのうちで、たった一人の女性、たった一人ではあるが、女性の最もよいところを多分に備えているらしいあの若い娘さんだ。

誰もいないと安心して来て見ると、意外にも自分というものが隠れていたから、それで急に恥かしくなつて引返したのだら

う、そうだとすれば気の毒なことだ、だが、こういった山奥の温泉宿で、それはあんまり遠慮が深過ぎはしないか。

なにも、ここへ入って来たとして、恥かしがるがものもありはすまいに、しおらしい遠慮だと、兵馬はまたかえつて、それを微笑みました。

兵馬の推察は、半分は当たっているが、あとの半分——どんな心持でその娘が急に立去ったかは、全くわかつたはずがありません。

お雪のこの心づかいは、賢明なものでありました。

それは、自分たちとしては、誰に逢つても、誰と話をしても、さらに後ろめたいことは無いけれども、自分たちの連れには、人に知られていいか、悪いかわからない人がいる。当人も人には逢いたがらないし、自分たちも人に会わせたくないと思う人

が  
いる。

湯治に来たとはいうものの、実はその人を隠さんがために、はるばるこの白骨の山間<sup>やまあい</sup>まで来たというような結果になっている。

その人は、ことさらに逃げ隠れるという卑怯な振舞はないが、陽<sup>ひ</sup>の目、人の目を、避けることを好んでいるらしく、また、おのずから、それを避けるように出来ている。

お雪は、その人が、こうなるまでの来歴を知らない。知りたいたとも思うが、そこを掘ると底知れない暗やみの穴が現<sup>こわ</sup>われて、自分がその中にまき込まれるように思うから、怖<sup>こわ</sup>くてその蓋<sup>ふた</sup>があけられないような心持でいる。

しかし、その人の魂<sup>たま</sup>には、あらゆる創<sup>きず</sup>がついて、そこから血<sup>にじ</sup>が滲み出ているのを、まざまざと見せられる。

容易ならぬ罪業ざいごうの人である。

男というものは、鬪しきいを跨またげば七人の敵があるものだという話だが、この人の敵は、七人や八人ではあるまい。

それはどこに、どういう敵を持っているのだからわからないけれども、どのみち、誰にも知られないうちに、あの満身の病根に療養を加えさせて上げたいという、暗示的に来る同情心が、この際、お雪の逸はやる心を抑えて、そうして、飛び立つほどに名乗りかけてもみたかつた兵馬に対して、一言も言いませんでした。

一言も言わないのみならず、先方でまだ気がつかないでいるのを幸い、自分も、あの人の帰るまで、姿を見せないでいるのが分別ぶんべつだと心を決めてしまったのは、全く聡明な思いやりでありました。

無論、お雪は、二人の間の執拗しつようなる葛藤かつとうを、少しも知ってい

るのではない。

ただ、こちらは隠れている人、隠れないまでも、人に会わせたくも、逢いたくもない人であるのに、先方は、今時分、こうして、この山奥まで、雪を冒おかして、入り込んで来る以上は、それは徒らいたずに紛れまぎ込んだと思われぬ、道に迷うたともいわれぬ、何か目的があり、何か尋ね求めんとするものがあればこそ、この時分、このところへ、わざわざ足を踏み入れたものに相違ない。

もしや、心安立こころやすだてに面かおを合わせるいとぐちことが緒いとぐちとなつて、退引のつびきならぬこんがらかに導いた日には、取つても返らないではないか。

あの若い方は、素直な方であるし、自分にとつては、危うきを救われた恩人である。この場合、知つて知らないふりをする

のはつらいけれど、思い合わせてみると、その時分から、何かを尋ね尋ねて歩み疲れていた人のようではあった。

それに気味の悪いあの二人連れの壮士。どちらにしても、会わせないがよい、会わないがよい、というお雪の心づかいは、聡明でした。

しかるに、この聡明なお雪の心づくしを知るや知らずや、その宵に至ると、例の座敷で、竹調べがはじまり、ついで「鈴慕」の響きが起りました。

お雪は、それを聞くと、今晚はあらずもがなだと思いました。せめて、あの笛の音が、今いう新来の客人たち、つまり、さいぜんの若い旅のさむらいの人と、それから、どう考えても気味の悪い二人連れの壮士とにだけは、あの笛の音を気取らせたくないという心が無性むしようにお雪の胸にのぼります。あの笛の音、そ

これから自分の心づくしがふいになるようではたまらぬ。

お雪は、その尺八の音に気を揉もみましたけれど、尺八の音は、お雪の苦心に頓着なく、冷々れいれい亮々りやうりやうとして響き渡ります。

影は隠せば隠せるが、音というものは、隠して隠すわけにはゆかないらしい。

その尺八の音を聞いた時に、あちらの室にいた仏頂寺弥助が、耳を蔽おほうて畳の上に突ツ伏しました。

「忌いやだ、忌だ、おれは、あの尺八の音というやつが忌だ」  
それを、丸山勇仙が笑止がつて、

「性に合わないのだろう、君は、風流というものに縁無しゆじようき衆生だ」

「どうもいかん、あれを聞いていると、心が滅め入いるのみならず、

骨と、身が、バラバラに解けて、畳の中へしみ込んでしまいうだ」

起き上つたが、両の耳に、しつかと掌を当てて、

「どこか、あいつの聞えない座敷はないものかなあ」

「もう少し待てよ、そのうちに終る」

丸山勇仙は、必ずしも、それほどに悪い気持で尺八を聞いているのではない。だから、他人の痛いのは百年も我慢するつもりで、落ちつき払い、

「客ニ洞簫ヲ吹ク者アリ、歌ニヨツテ之ヲ和ス、其ノ声、嗚々然

トシテ、怨ムガ如ク、慕フガ如ク、泣クガ如ク、訴フルガ如

シ、余音嫋々トシテ、絶エザルコト縷ノ如シ、幽壑ノ潜蛟

ヲ舞ハシ、孤舟の嫠婦ヲ泣カシム……」

と、余音をことさらに長くひっぱって空嘯いていましたが、そ

のうちになんとなく、自分も悲しくなりました。

仏頂寺弥助は、しつかりと耳錠みみじょうかいながら、

「まだ、やつてるかい」

「うむ」

丸山勇仙がうなずいてみせると、面かおをしかめて、いつそう耳錠を固くする。

「蘇子、愀然しゅうぜんトシテ襟ヲ正シ、危坐シテ客ニ問テ曰ク、何ス

レゾ其レ然しかルヤ、客ノ曰ク、月明ラカニ星稀ニ、烏鵲うじやく南ニ飛

ブハ此レ曹孟徳ガ詩ニアラズヤ、西ノカタ夏口ヲ望ミ、東ノ

カタ武昌ヲ望メバ、山川相繆さんせんあひまとヒ、鬱乎うつこトシテ蒼々そうそうタリ、此レ

孟徳ガ周郎ニ困くるしメラレシトコロニアラズヤ……」

「まだかい」

仏頂寺弥助が渋面をつくると、丸山勇仙は、前と同じように

首を横に振り、

「其ノ荊州けいしゅうヲ破リ、江陵ヲ下リ、流レニ順したがツテ東スルヤ、舳艫じくろ千里、旌旗せいぎ空ヲ蔽おほフ、酒ヲソソイデ江ニ臨のぞミ、槩ほこヲ横タヘテ詩ヲ賦ス、マコトニ一世ノ雄ナリ、而シテ今安いづクニカ在ル哉、  
いは況ンヤ吾ト子トなんぢ江渚こうしよノホトリニ漁樵ぎよしやうシ、魚鰕ぎよかヲ侶つれトシ、麋鹿びろくヲ友トシ、一葉ノ扁舟へんしゅうニ駕シ、匏樽ほうそんヲ拳ゲテ以テ相属あひしよくス、蜉蝣ふゆうヲ天地ニ寄ス、眇びやうタル滄海そうかいノ一粟いちぞく、吾ガ生ノ須臾しゆゆナルヲ哀かなシ、  
 長江ノ窮リ無キヲ羨ミ……」

そこで、丸山勇仙が、一種の反抗的昂奮を催してきました。反抗的とはいうが、何が反抗だかわからない。ただ、むやみに一種の昂奮を催してきたらしい。

しかし、仏頂寺弥助が耳錠を取った時分には、尺八の音は止やんでおりました。

「あ、助かった」

ホツと息をついた時に、丸山勇仙が、

「君は、それほど尺八がいやなのかい」

「尺八と、木魚もくぎよだ、あれを聞かされると、ほとんど生きた空は

無い」

「不思議だね」

「いやといったって、嫌いじゃないんだね、虫が好かない、というでもないのだね、そうだ、怖いんだ、むしろ一種の恐怖を感じるので」

「へえ、尺八と、木魚を聞いて、恐怖を感じるといふ人をはじめて見た」

「しかし、恐怖というよりほかは言いようがないのだ、嫌悪けんおじゃなし、憎悪ぞうおじゃなし、やつぱり怖ろしいんだ、あの二つの音に、

恐怖を感じるとより言いようがない」

「君ほどの人がねえ……君の亡者ぶりには、大抵の人がおぞげをふるうのに、その君が、尺八と、木魚に恐怖を感じずる——さあ、弱味を見て取ったぞ、仏頂寺を殺すにや刃物はいらぬ、笛と、木魚で、ヒューヒューチャカボコ……」

十五

お雪が気を揉ももうとも、仏頂寺が恐怖を感じようとも頓着のない、この座敷のあるじは、感激の無い「鈴慕」の一曲を冷々として吹き終りました。

さあ、こまちやくれたピグミー、昔を恨み顔な女——出て来るなら今のうちだよ。

だが、今晚は魑魅魍魎ちみもうりようが出ないで、あたりまえの人が来ました。

「先生」

軽く息をきつて、障子を忍びやかに開いて来たのはお雪です。

「御免下さいまし」

それは燈火あかりのついていない真暗な座敷です。

心得ているのか、入って来たお雪は、あれほど気の利きいた子でありながら、暗い座敷へ入って、まず燈火をつけようとの試みもしないで、少しばかり畳ざわりの音がしたかと思うと、それつきり静かで、何も聞えませんが。

暫くあつて、息をしずめたお雪が、哀求するように言いました、

「ねえ、先生、当分、あの尺八はお吹きにならないようになさ

いましな」

「それは、どうして」

「でも、なんだか、気味の悪い人が来ていますもの」

「そうだ、このごろになって誰か来たようだが、なにかい、どんな人だい」

「どうも何だか、人を探しに来たような人たちですから御用心なさいませ、その御用心のために、笛はお吹きにならない方がよかろうと思います、そうして、わたしなんぞも、なるべく姿を見られないようにしようと思いました」

「なるほど、いまごろになつて、ここへ来るような奴は怪しいね」

「それでも、明日はお帰りなさるような模様でございます」

「では、その連中の帰るまで、笛を吹くことはやめにしようか

な」

「そうなさいまし……それから先生、昨晚は夢をござんになり  
ましたね」

「夢なんぞは毎晩のように見るよ、昨晚に限ったことはありま  
せん。そら、明るい目で物が見えないだろう、だから、物を見  
ないで、夢を見るのが本職のようなものさ」

「そうおっしゃればそうかも知れませぬえ。いったい、どん  
な夢をござらんなさるの」

「どんな夢とって、夢のことだから、とりとまりはないのさ。  
けれども不思議だな、夢を見ているうちだけが、人間らしくな  
るよ」

「ようござんすねえ、沢山よい夢をござらんさいまし」

「よい夢ばかりは見ておられない、見たくもない夢もずいぶん

見るけれど、どうも夢のことだから、えりごのみをするわけにはゆかないのさ」

「そうですねえ、夢ばかりは、見たいと思ってもいい夢が見られず、見まいとしても、悪い夢を見たがるものですから……でも、先生、やっぱり、心に無いことは、夢にも見ませぬのねえ。わたしもこのごろは、変った夢を見るようになりました」と前置をしてお雪が、自分の夢を次の如く語り出しました。

「わたしのこのごろ見る夢は、怖い夢ではございません、イヤな夢というのでもございません。それは怖い夢も、イヤな夢も、ずいぶん見ないことはありませんが、このごろは、山の夢を見ることが多いんでございますよ。高い山の夢ばかり見るような癖がついたのかも知れませんが……それというのは、ここでは皆さんが、山の話ばかりなさるから、それで、わたしの夢もつい

つい、山のことになつてしまふんじゃないかと思ひます。けれども怖い夢や、イヤな夢を見るより、山の夢を見る方が、どのくらい楽しいか知れません。それは山へ登りたいと思ひながら、登れないものですから、よけい、夢になりたがるんでしようと思ひます——わたしの見た山の夢を、話して上げましようか」

山の話が讖しんをなしたものか、お雪の雄弁——熱を以て語る山のおこがれが、竜之助の頭腦のうちに絵のような印象を植えつけたものか、その夜、竜之助は、雪を頂く高峰のめぐるある地点に立つところの自分を発見しました。

銀のような山上の雪のまばゆきに映りあつて、その空の碧みどりのまたなんとというめざましいことだろう。人の魂を吸いこむほどの碧の色、こうもまあ冴さえた色があり得るものかと思ひました。

有らん限りの自分の視力を払って、竜之助は高峰の山々をながめました。

その山々の名は先刻、いちいちお雪から指さして教えられたはずであつたが、今は茫洋として覚えておりません。名の記憶は茫洋に帰してしまつたが、自分の放つ視力のめざましきは、疑おうとしても、疑うわけにはゆきません。

遠近も、高低も、カーブも、スロープも、心ゆくばかり明快にうつるのみではない、雪に照り映はえている自分の一枚の白衣びやくえが、鶴の羽のようにかがやくのを認めました。

どうして、この時、一枚の白衣で寒くないのだろう。寒くないのみならず、何ともいえない軽快なすがしき。自分の四肢五体までがすっかり、この鶴の羽のように、さえ返っているのではないかと疑いました。

彼が眼の不自由を感じるのは、その醒さめている時だけであり  
ます。

多くの人が日の光のめぐみに浴する時こそ、彼は肉眼も、心  
も、全くの暗黒で、世の人が光を隠されて暗黒の眠りにつく時  
に、彼に自由の天地があり、どうかすると、赫々かくかくたる光に眩惑げんわく  
されることもある。

しかしながら、この夜の自由は、その以前の夜の自由とは、少  
しく性質を異にしてきたようです。何よりもまず夢の世界に立  
つ時、未だいまひとたびも、自分の視力を疑ったことのないのが幸  
いといえは幸いでしよう。

とはいえ、雪をいただく大山脈を長城にして、めざましい空  
の碧みどりの色を、こうもあざやかに見たのは、今がそのはじめです。  
「ここが有名な白馬はくばヶ岳たけのお花畑でございます、まあ、この美

しいとも何とも言いようのない花の色をごらんなさい」

後ろから呼ぶ声で、顧みると、それはお雪です。花の色を見る前に、竜之助はお雪の姿を見ないわけにはゆきません。

この娘の姿といつても、面かおといつても、かねて潜在の実印象が少しもあるのではありませんが、竜之助は、直ちにその娘が、お雪だとわかりました。

それは、声だけでも無論わかるはずですが、この時は、面おもだち、その姿、それがお雪でなければならぬと思ひました。

黒い髪の毛を洗い髪にして、白おもて面に愛嬌あいぎょうをたたえている、その無邪気にして、魅力のある面かおが、お雪ちゃんでなければならぬと思ひました。

ことにその着物をごらんなさい。自分の白衣びやくえも、鶴の羽のよ  
うな白いかやきに見えますが、お雪ちゃんのその衣裳は、百

練の絹と言おうか、天人の羽衣はじろもといおうか、何とも言いようのない白無垢しろむくの振袖で、白無垢と見ていると、裾模様のように紫の輪廓ゆきわの雪輪が、いくつもいくつもその中から、むら雲のように湧いて出るのを見受けます。

「まあ、この花の色をごらんなさい、ありとあらゆる花が、ここに咲いているではございませんか。色という色がみんなここにこぼれているようでございます。これは百合に似た花でございますが、紫の濃いところが違います。こちらをごらんなさい、

花も、葉も、枝も、すっかり白天しろびろうど鶯絨ではございませんか。こ

れはまあ、真黄色まつきいろ！ こんな大きな梅鉢草うめぼちそう！ これは石楠花しやくなげと

躑躅つじの精かも知れません。白蓮華びやくれんげ……とでも申しましょうか、

この白さの深いこと、可愛いじゃありませんか。この十坪ばかりのところは、すっかり桜草の一族で固めて、他人を入れまい

としておりますよ。どれを見ても、これを見ても、色のよいこと——それもそのはずです、この高いところで半年の間、この真白な雪で研みがかれたんですもの、下界の花とは色の深さが違います、強さが違います、位も違うのは仕方ありません」

空間のめざましさに、眼をさました竜之助は、地上の美観にも目を奪われないわけにはゆきません。なるほど、これがお花畑。人間の手で作れない、雪と、氷と、高さとの力で作られた、天然の花の色。

「これが深山薄雪みやまうすゆきっていうんでしよう」

お雪はその一つを摘つみ取って、自分の唇につけながら、

「この信濃の国のうちでも、お花畑のいちばん美しい山は白馬ヶ岳だそうでございます、それはいちばん北の方にあるから雪が多く、雪が多いから地面にうるおいが出て、うるおいがあるか

ら、こうした植物が好んで棲むのだと、山の案内の方が教えてくれました。全くその通りだと思いますわ。あなたは久しく物の色というものをごらんになりませんね、ですから、しつかりとこの深い色、汚れのない色をごらんあそばせ、そうして、花の名もよく覚えていて下さいな、深山薄雪といつて、わたしの名と同じことなんです」

その花を、竜之助の眼の先につきつけました。

真正に、清浄な紫の色、この色が下界の花には無いと、竜之助も思いました。

「あれ、蝶が……」

とお雪は山吹のような金色の花模様の中に、ヒラヒラと舞う白い蝶を捉えようとして、浅瀬に裳をとられたように引返し、  
「深山白蝶みやまはくちようというのが、あれかも知れません」

信濃ギンバイの黄金の中に、深山白蝶の色。

蝶を追うて、二人は静かに上りにかかる、花をいくつも摘んで胸にかかえたお雪が、行手の山を指さして、

「白馬の頂いただきが見えました」

「なるほど」

その山嶺を仰ぎ見ますと、真白な雪が、身ぶるいしているのを認めました。

「裏の国では、あれを大蓮華山だいらんげさんと申します、こちらではシロウマと申します、それを、今では誰が言いならわしたか、ハクバケたけ岳けが通り名になってしまいました」

お花畑を出でると、雪の溪間たにまがある、林泉がある、見慣れない獣けものが、きよとんとして、こちらを向いている。

「あれが羚羊かもしかです、あの獣は赤いものが好きで、赤いものさえ

見せれば半日でも見ています」

お雪は帯の間から、これも目のさめるほどな紅絹もみの布片ぬのきれを取り出して、その獣に向つて振ると、眼をクルクルして、いつまでもそれを見ている。

「ああして、これを恐れないのは、人を信じているからでしょう、あぶないものですね」

少し進んで行くと、偃松はいまつの間から、のそのそと一羽の鳥が出て来る。

「ごらんなきい、雷鳥が出て来ましたよ、あの鳥もまた人を怖れません」

やがて頂上に近くなつたのでしよう、残雪のまばらな、焼野原のようなところに出て来ました。

東道気取りに先に立つたお雪が、あたりを見廻して、

君と行く白馬ヶ岳の焼野原

と歌い出しました。興に乗じて歌を詠よむつもりでしたらう。それが、どう間違つてか、白馬ヶ岳の焼野原と言つてしまつたので、グツとあとが詰まつたようです。

「白馬ヶ岳をうたうのに、焼野原では付きませんね」

お雪は、焼野原に替かへるにお花畑を以てしようか、雲の海を以てしようか、偃松はいまつを以てしようか、雪溪を以てしようか、その苦吟をはじめたらしい。

その時に、雲が濛もうもう々と湧いて来たものですから、ほとんど十歩ばかり先に進んでいたお雪の姿が見えません。

お花畑も、焼野原も、一樣に、この濛々たる白雲につつまれてしまいました。

ほどなく雲霧の晴れた時、自分の立っているところ——多分

それが、白馬ヶ岳の頂上なのでしようと思ひます。

今は、照りかがやいていた天上も、落日の時と覺しく、山と、空との間を彩るところいろどのものは、金色こんじきであります。

その金色が、山際からようやく天空に向つてぼかされて行く間に、大洋に浮ぶ島々のように、ちぎれちぎれの雲が流れていたり、その雲の間を悠々ゆうゆうとして、多くの鳥が泳いだりしていません。

お花畑のあたりでは、仰いで見た雲の山岳が、ここでは相呼びかわすの地位となりました。古人として見たものを、今人として見るのです。偉人として仰いだものを、友人として認めるの地位になりました。

お花畑の花の色の透明にして深甚しんじんなのに酔わされた竜之助は、ここに来て、永遠と、無窮とを彩る、天地の色彩の美に打たれ

ないわけにはゆきません。

ふと顧みると、いつのまにか、自分のかたわらに立っていたお雪の姿が変りました。

ははあ、また誰か意外の人が来ているなど、怪しんだのは瞬間で、

「あなたは、どの山を見ていらつしやいますか」

その声は、お雪に違いありませんが、その姿は、純白な笠に、純白の笈摺おいずるに、そうして銀のような柄杓ひしやくを携えた巡礼姿であります。

「すばらしい眺めだよ」

と竜之助が、眼を拭いました。

「あなたのお目を、今まで塞いで置いたのは、こういう景色を見せて上げようがためではございませんでしたか知ら」

「そうかも知れない」

「ただ、眺めておいでになっただけでは、さだめて物足りないことと存じます、御案内を致して上げましょうか」

お雪はその銀の柄杓を取り直して、竜之助の当面、南の方にそそり立つ山の一つをさして、

「あれが槍でございます」

「ははあ」

「その次が穂高！」

「ははあ」

「穂高の向うの大きなのが乗鞍ヶ岳でございます、わたしたちのおりまする白骨温泉の真上に、あの山がかぶさっております。それから、あの槍と、穂高との間に、煙の上っているのがお見えになりますかしら」

「見える、見える」

「あれが焼ヶ岳の煙でございます、ほかほかの山々は、みんな眠っておりますけれど、あの焼ヶ岳一つが煙を吐いております」

「なるほど」

「駒ヶ岳が、お見えになりましたよ」

「どれ？」

「富士山と、赤石と、八ヶ岳とが、遠くかすんでおりまするそのこちらに」

「うむ、なるほど」

「あのお山に昔、天津速駒あまつはやごまという勇敢なる白馬が棲すんでおりました、それは武甕槌たけみかづちという神様の魂から生れた馬だそうでございます、双そうの肩に銀の翼が生えていて空中をかけめぐり、夜に

なると、あの駒ヶ岳の頂上で寝むのだそうでございます」

「なるほど」

「それから、あの乗鞍ヶ岳には、あめのやすくら天安鞍というのがあったそう  
でございます、その鞍を馬につけて乗れば、どんな馬からでも、  
落ちることがないと申します」

「うむ」

「槍ヶ岳には、あめのひほこ天日矛というのがございました、その矛先は常  
に盛んなる炎に燃えていたそうでございます」

「ははあ」

「それから越中の立山——たてやまごらんなさい、あの雄大な、あのけんしゅん険峻  
な一脈が、あれが立山連峰でございます。立山の上には、あめのひろたて天広楯  
というのがございました、敵にその楯を向けると、敵の大小に  
よつて、楯が伸び縮みをするという楯でございます……」

「お雪ちゃん、お前は何でもよく知っていますね」

「わたしが、そんなに物識りものしりなのではございません、みんな白骨温泉の炉辺閑話の受売りでございませうから、買いかぶらないように、お聞き下さいませよ」

ここで、今までは、神仙化されていた娘の生しやうの姿が、ちよつとひらめいたので、あぶなく現実に帰ろうとした竜之助の眼が、立山連峰の一つの、最も鋭く、最も険峻なるものに、ひたと吸い寄せられてしまいました。

一旦、少しばかりハニかんで、人間味を見せたお雪が、ここ  
で以前の、超現実の説明者の地位に戻りました。

「昔、昔、那須の国造くにつこが、八溝山やつみぞさんの八狭やざまの大蛇おろちを退治しなければならぬために、それには、どうしても駒ヶ岳あまつはやごまの天津速駒あまつはやごまに乗り、乗鞍ヶ岳あめのやすくらから天安鞍あめのやすくらを、槍ヶ岳あめのひほこから天日矛あめのひほこを、立山から

あめのひろたて

天広楯を借受けなければならぬと、はるばるこの信濃の国まで、たずねて参りました……」

お雪は、ここまで語りつづけた時に、自分が語り聞かせようとしている当の人が、自分の説明を、少しも聞いていないことをさとりました。

自分の説明を聞いていないのは、自分の言うところに注意するよりは以上に、注意すべき何物にか心を奪われているのでしよう。

そこで、無益の説明を中止して、その人の凝立ぎょうりつして、眼を吸い寄せられているところを、お雪が安からぬ色で認めて、

「そんなに、あの山がお気に入りしましたか」

でも、返事がありません。

「あれは越中の立山の剣山つるぎのやまでござりますよ、まだ、あのお山の

頂<sup>いただき</sup>へは、誰一人も登った者は無いそうでございます」

「そうかなあ」

「槍ヶ岳は、あの通り、槍の穂先のように鋭くそそり立っておりますが、それでも、登れば登れるそうでございます、立山の剣山ばかりは、誰も登ったものは無し、登ろうとする者さえ無いと聞きました。よし、登ろうとする者があつても、どちらから見ても、あの通りの断崖絶壁で、手脚の着けどころが無いのでございます。そうして、じつと見ているうちに身の毛が立つて、怖<sup>こわ</sup>くなつて、さすが向う見ずの山登りも、断念して帰るのだそうでございます……昔の弘法大師さえも、千足の草鞋<sup>わらじ</sup>を用意なすつて、それを穿<sup>は</sup>ききつてもまだ登れなかつたのが、あの山だそうでございます」

「なるほど、そうかも知れない……でも、今、誰か登っている

ようだぜ」

「御冗談ごじょうだんでしよう、よしんば登る人がありましても、ここからそれが見えるものですか」

「ところが、この眼で見える——おれの眼はどうかしているのか知らん、ああ、今日は何もかも見え過ぎるほど、見える」

「あなたにお見えになるほどのものが、わたしに見えないはずはございますまい」

お雪は、竜之助が棒の如く立って、凝視ぎょうししている、その越中の剣つるぎヶ岳たけの半面に向って、同じように、凝視の眼を立てました。

「見えるだろう、そら、あの頂上に」

「何も見えません」

「おかしいな、よく見てごらん、頂上に錫杖しやくじょうが立っている」

「え、錫杖が、あのお山の頂上に？」

「そうさ、ただ一本の錫杖が、絶頂の岩石の間に、突き立ててあるのが、お前には見えないのかなあ」

「少しも見えませんが、また見えるはずもございませんもの」

「だから、わしの眼が今日はどうかしているのだらう、こつちの眼では、ありありとわかるものが、お前の眼に少しも見えないとは……だが確かに錫杖が一本、あの剣ヶ岳の上に立っている。錫杖が存する上は、それを立てた人間がなければなるまい。人間がそれを立てたとすれば、古来、人跡至らずといわれた伝説は嘘だ……」

しかしながら、これは物争いになりませんでした。一方が見えるというものを、一方が全く見えないというのですから、議論になりません。

「ああ、お月様が出ました、新月が……何という、いじらしい

光でしょう。ですけれども、また触れば切れそうなああの鋭さと、冷たさ。わたしは、お月様のうちで、あの二日月がいちばん好きでございます」

お雪の眼は、山から月にうつりました。

なるほど、立山の連峰から、加賀の白山へつづくと覚しいところ、新月の影があります。

金色こんじきの、聖者の最期さいいじを彩る莊嚴そうげんに沈んだ山と、空との境目が、その金色の莊嚴を失つて、橙だいだいの黄なるに変わりました。

その間に緋々せんせんとしてかかる新月の美しさ。そうして、微かなるその新月の光に向いた山の峰が、涙の露を糸に引いたようなカーヴをかけているいじらしさ。

だが、その美しさも、いじらしさも、束の間つかまで、橙の黄なる空の色が、白蠟はくろうの白きに変る時分に、山々は一様に黒くなりま

した。

一様に黒くはなつたけれども、少しもその個性を失うのではない。槍は槍のように、穂高は穂高のように、乗鞍は乗鞍のよう、駒ヶ岳は駒ヶ岳のように、焼ヶ岳は焼ヶ岳のように、赤石の連脈は赤石の連脈のように、八ヶ岳の一族は八ヶ岳の一族のように、富士は問題の外であるが、越中の立山は立山のように、加賀の白山は加賀の白山のように——展望において、やや縦覧を惜しまれている東南部、針木、夜立、鹿島槍、大黒の山々、峠でさえも、東北の方、戸隠、妙高、黒姫等の諸山までも、おのおのその個性を備えて、呼べば答えんばかりにはない、呼ばないのに、千山巒くつわを並べ、万峰肩を連ねて、盛んなる堂々めぐりをはじめました。

天際と、地軸の間を表に真黒な沈黙、裏に烈々たる火炎を抱

いて動き出したそのめざましさに、二人は驚動しました。

「ああ、山という山が、みんな集まって来るではないか」

「山がみんな集まって、何をするのでしょうか」

「何をしでかすかわからない」

「あれ、富士山が——大群山が、丹沢山が、蛭ヶ峰が、塔ヶ岳

が、相模の大山——あれで山は無くなりますのに——まあ、イ

ヤじやありませんか、大菩薩峠までが出て来ましたよ」

「大菩薩峠が……」

「そらごらんなきい、相模の大山から、ちよつと、こつちの方、

武蔵の三ツ峰山までの間に、ちよつと凹んだところが見えましょ

う、あれが大菩薩峠の道でなくて何でしょう」

「そんなところまで、よくお前にはわかるねえ」

「わからなくてどうしましょう、わたしは、あの道を通つたこ

とがございますもの」

「あの道をかき、大菩薩峠の路をかき」

「ええ」

「それはいつのことだ」

「そうですねえ、まだ、あの時から五年にはなりませんよ」

「どうも不思議だ」

竜之助の頭が暗くなった時、天地もようやく暗くなりました。その暗い中に、巡礼の笠が、はつきりと浮ぶ。その子はほがらかな声で、

「暗くなりましたねえ、帰らなければなりません。どちらの道を帰りましょうか。峰伝いに杓子ヶ岳へ参りましょうか、そうして、日本のうちで、いちばん高いところにあるという岳の湯の天然風呂へ参りましょうか。そうでなければ、しょうれんげ小蓮華、だいにち大日

ケ岳<sup>たけ</sup>を通つて、大池へ下りましようか、大池から蓮華温泉へ出て一晩泊りましようか。或いはまた、真直ぐに大町まで出たものでしょうか。それとも、あなたのお好きなあの剣山まで、立山連峰の道を一息に走つてみましようか——」

そう言われても、帰る心になれませんでした。

天地が全く暗く、展望が全く奪われてしまつても、なお、ここに立つこと久しければ、再び夜の明ける時が無いではない——  
そうそう、今日は見なかつた日の出が明日は見られるはず。

十六

その晩「鈴慕」を、宇津木兵馬は、自分の座敷で「碁経」を読みながら聞いておりました。

「碁経」は、宿に有合せのものを旅のつれづれに、ひろげて見ただけのもですが、それでも、多少下地があるものですから、見て行くうちに興をひかれて、なるほど、ここはこうして打つものかな、こんな手もあつたものか知らん——と注意して行つて、なるほど、定石を打つと二三目は弱くなるそうだが、弱くなるのが本当だ。

自分も子供時分から器用で少しはやるが、本当にやろうとすれば、全部を白紙にして出直さなけりやならん。無法に強いのは、強いのならぬ。無法の勝ちは、勝つても負け——どの道も同じことだ。そんなふうに感心しながら、鈴慕を聞き流してしまいました。

尺八のことは、なおさら分らないから、いま何を吹いたのだか、当りもつかず、曲そのものに気を留めて聞こうとはしませ

んでした。それで、聞き終ると共に一種の哀愁を覚えて、「碁経」の巻を閉じました。

そこでなんとなく、座敷の外へ出てみたいと思つたのは、虫のせいかも知れません。

今宵は、前の晩のように間毎間毎を、探索の眼を以てたずねて廻ろうというのでもありません。

ただなんとなく、外へ出てみたくなつたので、出てみる時に、おのずから足が三階の松の間へ向いました。

あの娘のことが、気になっているのだなと、兵馬は自分ながら気がつきました。

なんとなく、足がそちらへ向いて、明日立つとすれば今晚限りだ、あの娘のところへ行つて、一応の暇いとまを告げてみたいという気になつたのは、自然かも知れません。

そうして静かに兵馬は、廊下を歩んで行つたが、二階のあの角の座敷に行くには、一度、三階へ上つて、それから下つた方が近路だと気がつくのと、そのまま三階へ上つてしまいました。

しかし、まだ名乗り合つて近づきもなにもしないのに、突然こちらから訪問するのも無躰ぶつぱではないか——なあに、先方は来る早々から、あんなに親切にしてくれたのだから、その親切に對しても、一応のお礼は述べに行かなければならん。

そんなふうには、自己弁解をして、三階の廊下を歩んで行くと、行手で、ふつと人の足音がしたものですから、兵馬は戸袋の隅に身をもたせかけて窺うかがいました。

誰だろう——暗いところで、音のした方向を見ると、人が一人、すつと出て来て、向うの降り口を鍵の手に廻り、さつさと二階へ下りて行くのを認めます。しかも、その人が、女である

ことが、ハッキリと兵馬の夜目にうつりました。

女でありさえすれば、それはこの全宿中に一人しかあるべきはずはない。自分が今たずねてみようかしらと心がまえしていとるところのあの娘――

そこで兵馬は、ハテと胸をつかれました。

この暗いところから、あの娘はひとり、三階まで何しに来たのだろう。

下へおりて行くなれば、どこへ行こうとも順だが、間違つて上へのぼるはずはないのだ。それとも、三階へ座敷替えでもしたのか。

だが三階のどこにも火の気のありそうなところは見えない。火の気が無ければ、人の気が無いのだ。その火の気も無い座敷の一つを、あの娘がおとすれたもののようにしか思えないのが、

おかしいではないか。

その不審は不審として置いて、兵馬は同じところから二階へ下り、案内知った東南の隅の間に近づいて見ると、ここは明りがしていますから、障子へ手をかけて、

「御免下さい」

とたずねてみたけれども、返事がありません。

「お不在ですか」

それでも返事がありませんけれど、思いきつてその障子をあけて見ましたが、たぶん、いま帰ったはずの娘もいなければ、同行の久助の姿も見えません。

その翌朝、宇津木兵馬は、帰るとも、とどまるとも決心がつかずにいると、どうも様子が変だから、尋ねてみると、仏頂寺

と、丸山は、今早朝に結束いかめしく出立してしまつたということですよ。

おお、そうしてみれば、こちらが結句、出し抜かれて幸いというものだ。

ちようど、やり過ぎた意味になるから、少し時を置いて自分も出立しよう——彼等は、どちらを向いて行つたか知れないが、多分、松本方面だろう。すれば自分は飛驒ひだの平湯ひらゆをめざして行こうかな。そうでもした方がよい。

座敷に帰つて、なにくれと出立の用意を試みたが、こうなると、そうだ早く帰るがいい、帰るがいい、というようなきさやきと、とてものこと、もう少しはどうかだ、もう一応駄目を押ししてみてもどうかだ、というような勧告が、どこからともなく聞えるようにも思う。そのいずれも無意味だが、帰るべき

ものとすれば一刻も早い方がよい。

出立にさきだつて、一度挨拶だけをして行きたいと心がけたあの娘は、今日は姿さえ見せぬ。

ぜひなく、宇津木兵馬は、孤身漂零としてこの白骨の温泉を立ち出でました。

例のあぶみじや鐘小屋の神主をも一応おとずれて行こうと、無名沼のほとりに来て見れば、なるほど、小屋はあるが人が無い。多分、山上へ修行にでも行つて留守なのだろう。

逢えない時には逢えないものだ——兵馬は、軽いあきらめを以て、かねて教えられていた道筋を、飛驒の平湯の方をめざして、山溪の間に没入してしまいました。

来たる時に、兵馬を誘引したらしい「鈴慕」の曲も、帰る時はおとさた音沙汰がありません。

こうして二ツの星が、逢わんとして、しき闕の内と外まで引寄せられて、また相距あいさること千万里。

しかもそのいずれも、自らきわどい運命を知ることができませんでした。

ことに兵馬は幾度か、こんな目に逢わされつけているが、自分自分がそれを知らないだけに、神様のいたずらに腹を立てたこともなければ、運命の数奇に頓悟したこともない。

多分、それは神様の方で、出直せ、出直せとおっしゃっているのかも知れない。求めよ、さらば与えられんとはいうが、求めて与えられないのは、求め方が間違っているのかも知れぬ。

これは単なる離合のあやつりではあるまい。

求めんとして与えられず、て掌の中へ入れてもらいなから、そ

れを受取ることを知らず、千里の遠くを見ながら、寸前の暗黒を如何いかんともすることのできない悲劇、喜劇は、この人間の世に無数であるのみならず、天上においても、無辺際に繰返されて  
いる。

この場合、白骨温泉に落合った二ツの星が、どちらが惑星わくせいで、どちらが彗星すいせいだか知らないが、二つ共に、一定の軌道をめぐつていないことだけはたしかのようです。

従来、五年半の周期で太陽をめぐるっていたレキセル彗星が、千七百七十九年、木星に接近したために、どうした変動か行方不明ゆくえふめいになつて、今日まで出て来ないということなのです。

これに反してブルック彗星は、同じ星に接近したために、従来二十七年の周期が七年に短縮されてしまったということなのです。

地球人は、とうにハリー彗星と衝突していたはずだが、その衝突の<sup>たけな</sup>酣わなる時も、われわれは何の異状なく、今、現に大衝突をしつつあるのだという自覚にも、現象にも、触るることなしに、無事安穩に通過してしまいました。

昭和三年七月三日（西暦千九百二十八年）江戸川大曲<sup>おおまがり</sup>で電車の大衝突があつた日の数分前、同じ地点を通過した大菩薩峠の著者は、現在、武州御岳山麓の道場でこの小説の筆を執つてゐるが、その数分時が、著者にもたらす運命の禍福に至つては、著者自身といえども予知することはできなかつた。

われわれは筆の調子で宇津木兵馬を引張り廻すのでもなければ、原稿の回数をひきのばすために、無用のペン先<sup>ろう</sup>を弄するわけでもない。

「<sup>ごうり</sup>毫釐有差天地懸隔」の道理が、可憐なる大菩薩峠の作者に、こ

うも筆を運ばせる。



底本：「大菩薩峠 11」ちくま文庫、筑摩書房  
1996（平成 8）年 5 月 23 日第 1 刷発行

底本の親本：「大菩薩峠 六」筑摩書房  
1976（昭和 51）年 6 月 20 日初版発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号 5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：原田頌子

2004 年 1 月 9 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。